

大阪府アレルギー疾患実態調査 調査報告書 【概要版】

大阪府健康医療部保健医療室地域保健課

協賛：アストラゼネカ株式会社

目次

I . 調査概要	P. 2
II . 調査結果概要 (抜粋)	P. 3
III . 主な調査結果	P. 6
i . 医師調査	P. 7
a. 属性情報	P. 8
b. 医師Summary	P. 15
ii . 患者調査	P. 30
a. 属性情報	P. 31
b. 患者Summary	P. 37

I. 調査概要

1. 調査の目的

アレルギー疾患対策基本法の基本理念を踏まえ、地域アレルギー疾患医療の実態を把握し、実情に応じた診療連携体制を検討する基礎資料にするとともに、大阪府のアレルギー疾患対策施策の検討に活用することを目的として実施。

2. 調査の対象 ※アレルギー疾患：気管支ぜん息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーのいずれか]

[医師調査]

- ・大阪府の医院、診療所、クリニック（病床数が20床未満の施設）にご勤務されている先生
- ・アレルギー疾患をもつ患者さんを診察する先生

[患者調査]

- ・自身がアレルギー疾患をお持ちの方及び子どもがアレルギー疾患をお持ちの方

3. サンプル数 医師調査 … 524s / 患者調査 … 1,000s

4. 調査手法 インターネット / 郵送

5. 調査地域 大阪府

6. 調査期間 医師：令和2年10月8日～同年11月4日 患者：令和2年10月9日～同年10月26日

Ⅱ. 調査結果概要（抜粋）（1）

【共通】

- 大阪府が進める、アレルギー疾患医療拠点病院の指定など「アレルギー疾患医療提供体制整備」の認知度は、医師30%、患者が6%と低い。《調査報告書P27,48》
- アレルギー疾患対策に関する要望は、医師、患者とも「情報発信の充実」が最も多い（医師：約3割、患者約4割）
 - これ以外は、医師・患者とも「アレルギー疾患啓発」「（緊急時の）受入体制強化」「施設情報の開示」「治療、照会方針の確立」といった要望が多い。
 - この他、医師からは「（オンライン化を含めた）研修等の充実」「拠点病院の増加」、患者からは「金銭的援助」等の要望がある。《同P29,49》

Ⅱ. 調査結果概要（抜粋）（2）

【医師】

- 他医療機関への患者紹介は、「よく紹介する」割合が各疾患約12%、「時々、紹介する」を合わせると、各疾患約7割以上を占める。《同P16》
- 他医療機関に患者紹介する際重視する点は、各疾患で「専門医の存在」「患者の利便性」「患者の希望」が6割近くを占める。特に、「時々、紹介する」際に重視する傾向。《同P18》
- 他医療機関に紹介又は紹介を検討する理由は、気管支ぜん息とアトピー性皮膚炎では「急激な症状の悪化」と「日常の症状管理が困難」が多く、食物アレルギーでは「検査・診断」が多い。《同P24》
- 患者を紹介しない・できない理由は、「紹介を要する患者がいない」以外に「患者の合意が得られない」「紹介すべき医療機関が分からない」「最寄りに適切な医療機関がない」という回答が、食物アレルギーにおいて特に多い。《同P25》
- 患者の紹介先として、各アレルギー疾患とも「同じ二次医療圏」の「一般病院」に紹介する割合が最も高い。それ以外のケースも「一般病院」への紹介割合が高い。《同P20》
- アレルギー疾患医療拠点病院が所在する二次医療圏（北河内・南河内・大阪市）で勤務する医師では、「大阪府のアレルギー医療提供体制の整備」を知っていた医師の方が、知らなかった医師よりも患者の紹介割合が高い《同P28》

Ⅱ. 調査結果概要（抜粋）（3）

【患者】

- 医療機関受診頻度は、各疾患で「症状があるときのみ受診」する割合が最も高い。食物アレルギーについては他の疾患と比較し「思いついたときに受診」する人の割合が高い。《同P39》
- 症状度合いは、気管支ぜん息及び食物アレルギーでは「安定し、快適な生活を送れている状態」の患者割合が高く、「アトピー性皮膚炎」では「若干症状があるが日常生活を送るうえで問題ない状態」の患者割合が最も高い。《同P40》
- 治療を進める中で、いずれの疾患も（症状が安定しないなどの）問題が発生した患者の約9割近くが医師に相談し、うち8割前後の患者が「治療法や薬の変更で症状が改善した」、1割弱の患者が「他の医療機関への紹介により症状が改善した」と回答。《同P43》
- いずれの疾患も、困っていることとして「日常生活への影響について」（5割前後）と「受診・治療について」（3割前後）が高い割合。一方、困っていないとする患者も約3割いる。《同P45》
- 疾患とつきあううえで必要と思う情報は、「治療方法」「医療機関」「薬品」「専門医など」の各情報が、いずれの疾患でも5割を超える高い割合。《同P46》
- 大阪府の様々な取り組みに対する認知率は、アレルギー疾患講演会が16%、府webが11%と、いずれも低い。《同P47》

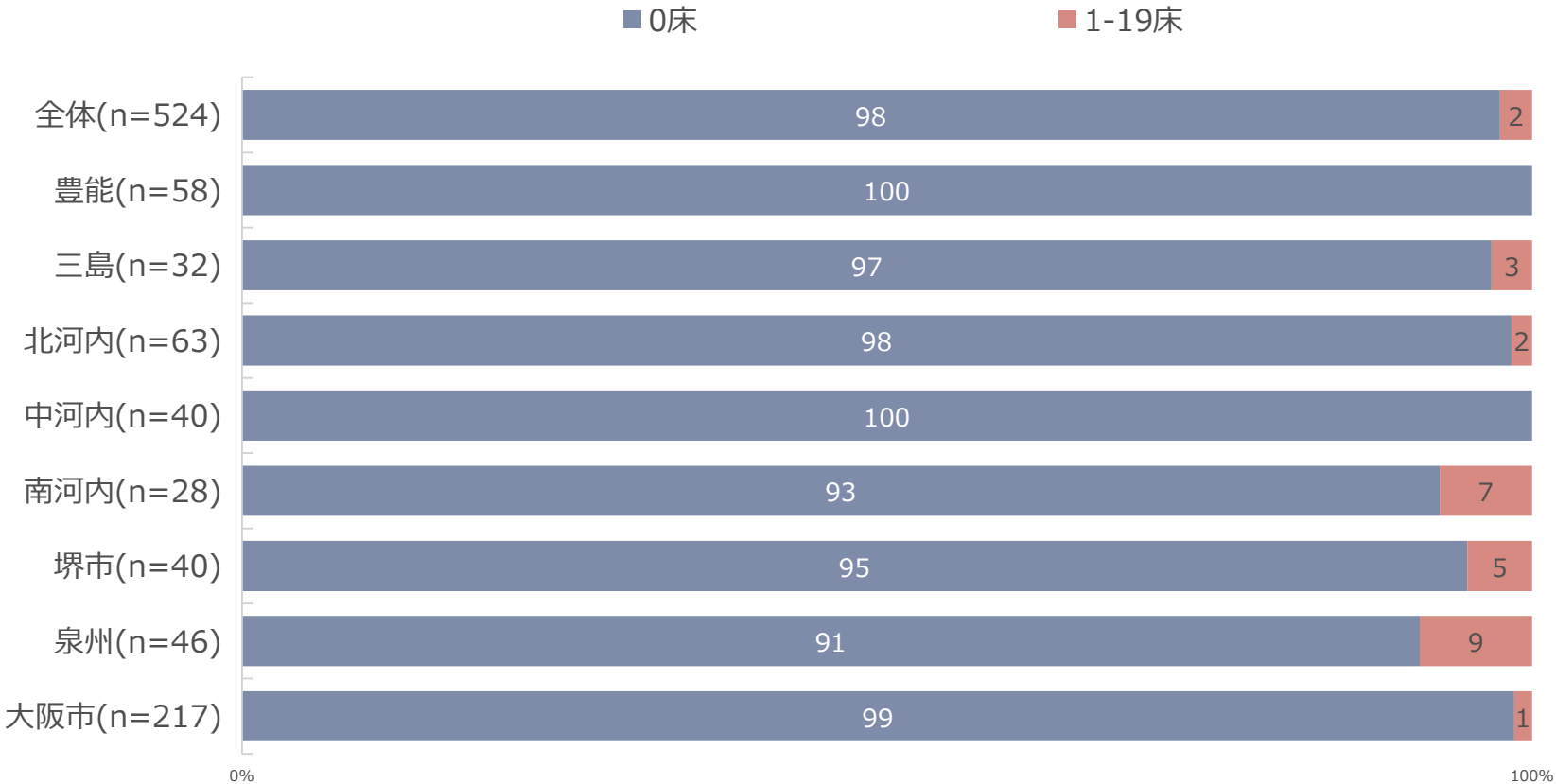
Ⅲ. 主な調査結果

Ⅲ- i . 医師調査

Ⅲ- i a. 属性情報

病床数内訳

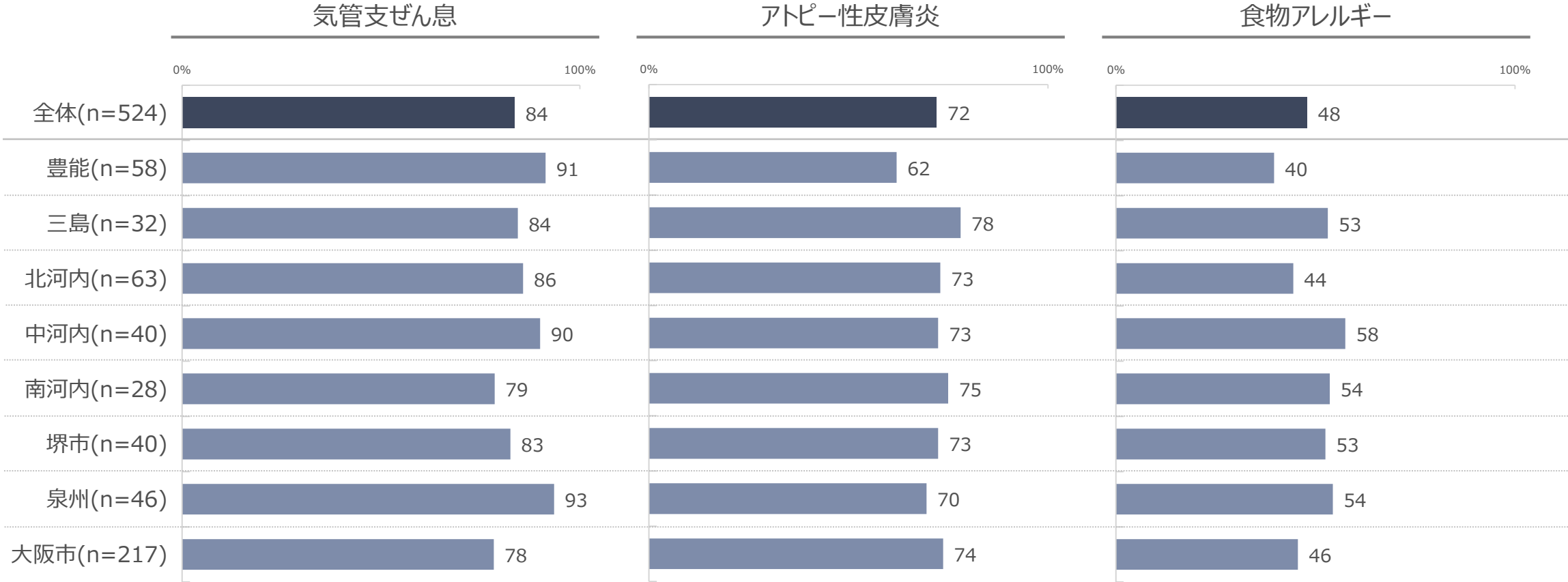
✓ 大阪府でアレルギー疾患をもつ患者さんを診療している医院・診療所・クリニックのうち、98%が0床の施設であった。



SC3. 先生のご勤務先の病床数をお教えてください。(ひとつだけ)

各アレルギー疾患の診療を行う医師割合

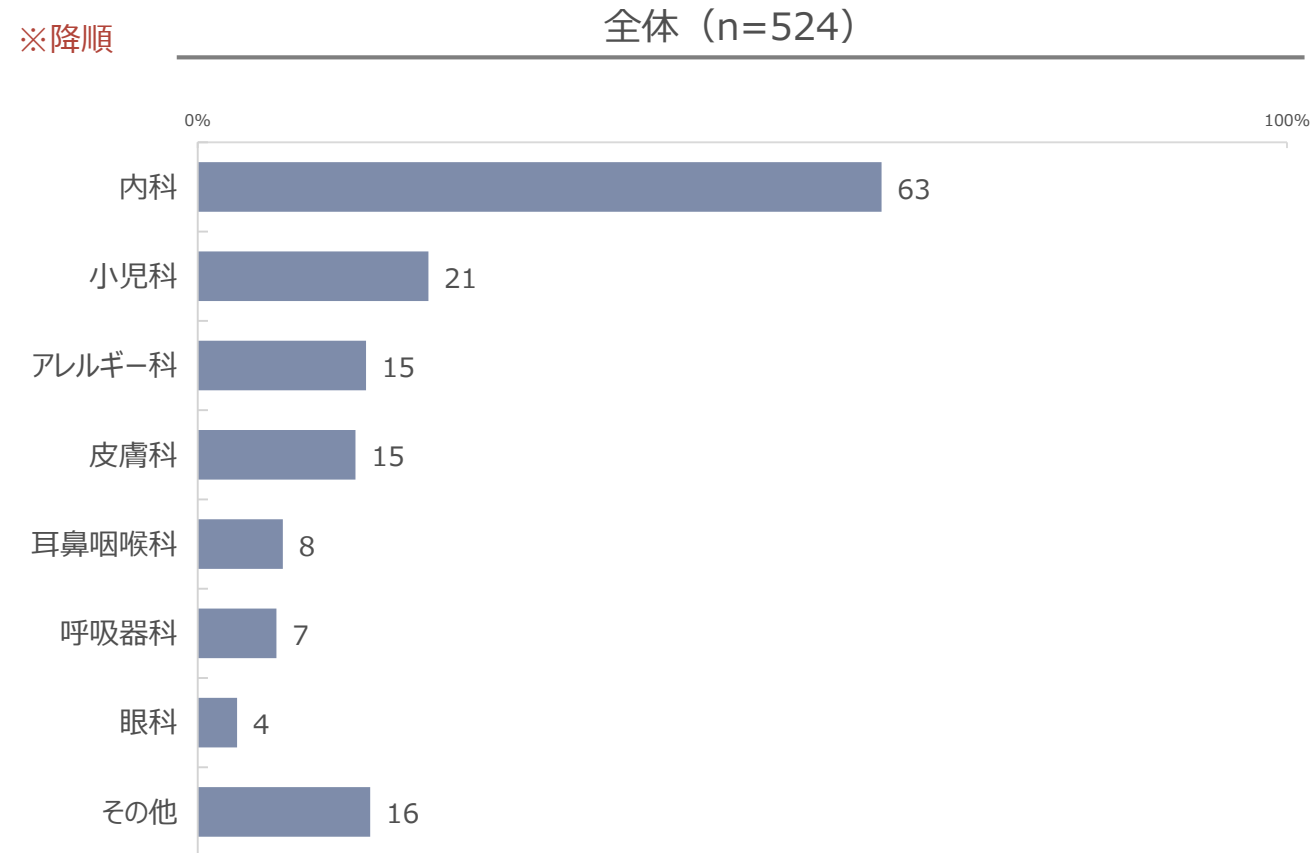
- ✓ 大阪府でアレルギー疾患をもつ患者さんを診療している医師のうち、気管支ぜん息の診療をする割合は84%、アトピー性皮膚炎の診療をする割合は72%、食物アレルギーの診療をする割合は48%であった。
- ✓ いずれの二次医療圏でも、食物アレルギーを診療する医師割合は、気管支ぜん息、アトピー性皮膚炎を診療する医師割合と比較して低かった。



SC4. 次のアレルギー疾患のうち、先生が診療を行っている疾患をすべてお選びください。(複数回答可)

【全体】 標榜診療科（複数標榜）

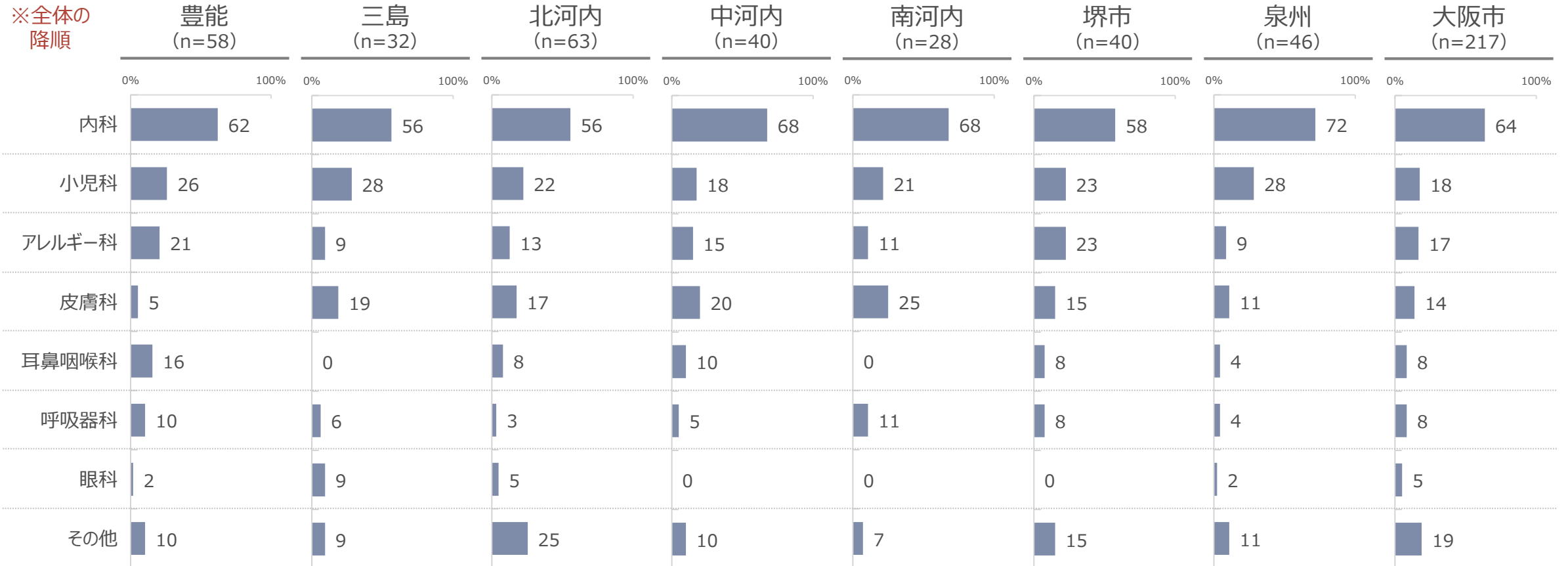
✓ 大阪府でアレルギー疾患をもつ患者さんを診療している医師が標榜している診療科として最も割合が高いのは「内科」で63%。続いて、「小児科」21%、「アレルギー科」15%、「皮膚科」15%、「耳鼻咽喉科」8%であった。



Q1. 先生のご勤務先が標榜されている診療科目について教えてください。（複数回答可）

【二次医療圏別】 標榜診療科（複数標榜）

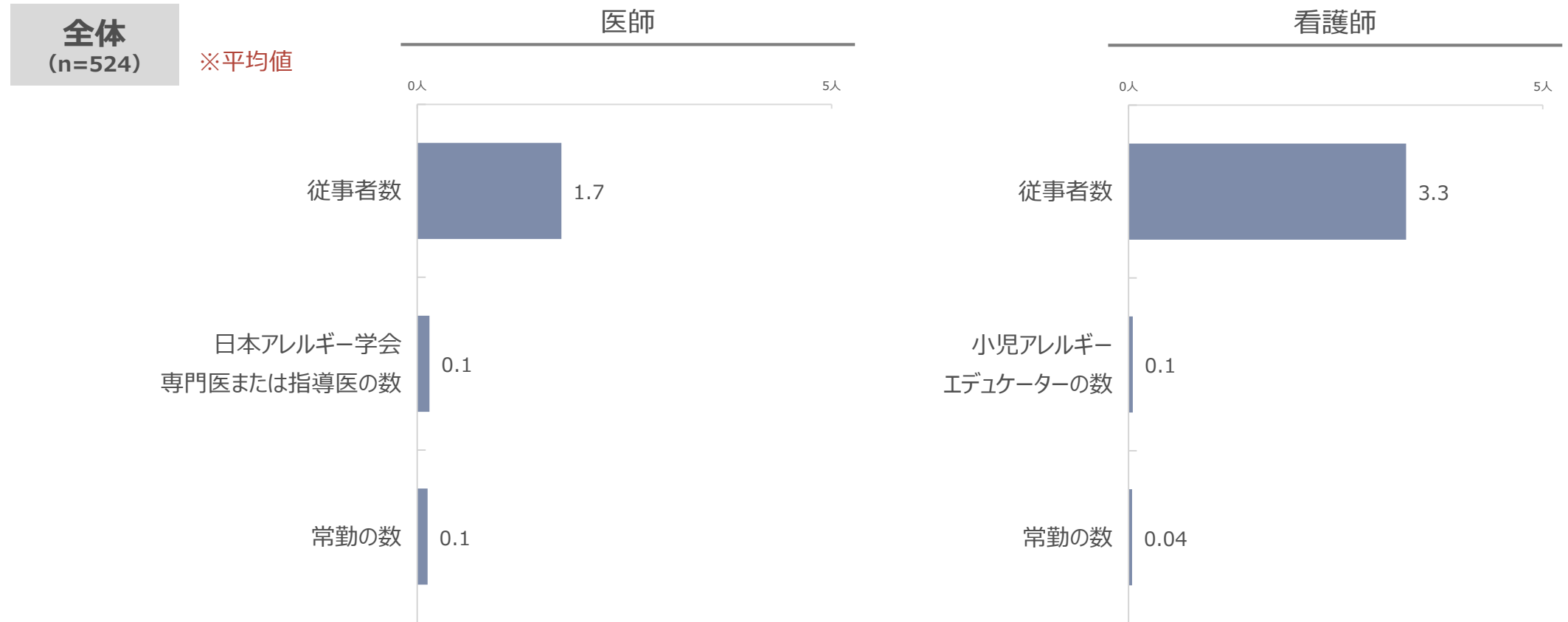
※全体の降順



Q1. 先生のご勤務先が標榜されている診療科目についてお教えてください。（複数回答可）

【全体】 アレルギー疾患の診療等に関する医療従事者の配置状況

- ✓ 大阪府でアレルギー疾患をもつ患者さんを診療している施設における医師数は平均1.7人、看護師数は平均3.3人であった。
- ✓ 医師のうち、日本アレルギー学会専門医または指導医は平均0.1人、常勤の数は平均0.1人であった。
- ✓ 看護師のうち、小児アレルギーエドゥケーターは平均0.1人、常勤の数は0.04人であった。

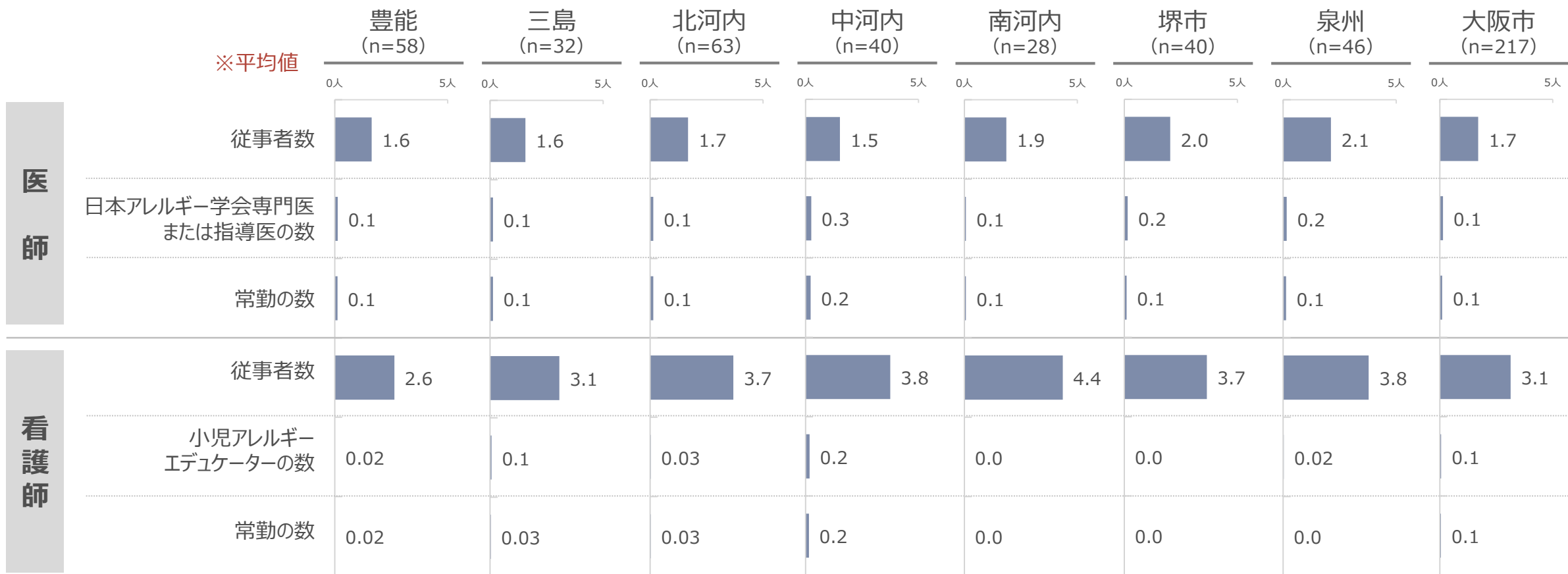


Q2. 貴院においてアレルギー疾患の診療等に関する医療従事者の配置状況についてお教えてください。

【二次医療圏別】

アレルギー疾患の診療等に関する医療従事者の配置状況

- ✓ アレルギー疾患をもつ患者さんを診療している施設での医師平均従事者数は、泉州で最も多く、2.1人。続いて、堺市2.0人、南河内1.9人。
- ✓ 一方、看護師平均従事者数は、南河内で最も多く、4.4人。続いて、中河内と泉州で3.8人、北河内と堺市で3.7人であった。
- ✓ 中河内では、日本アレルギー学会専門医または指導医、小児アレルギーエデュケーターの看護師の平均値が、他の二次医療圏と比較して高い傾向にあった。



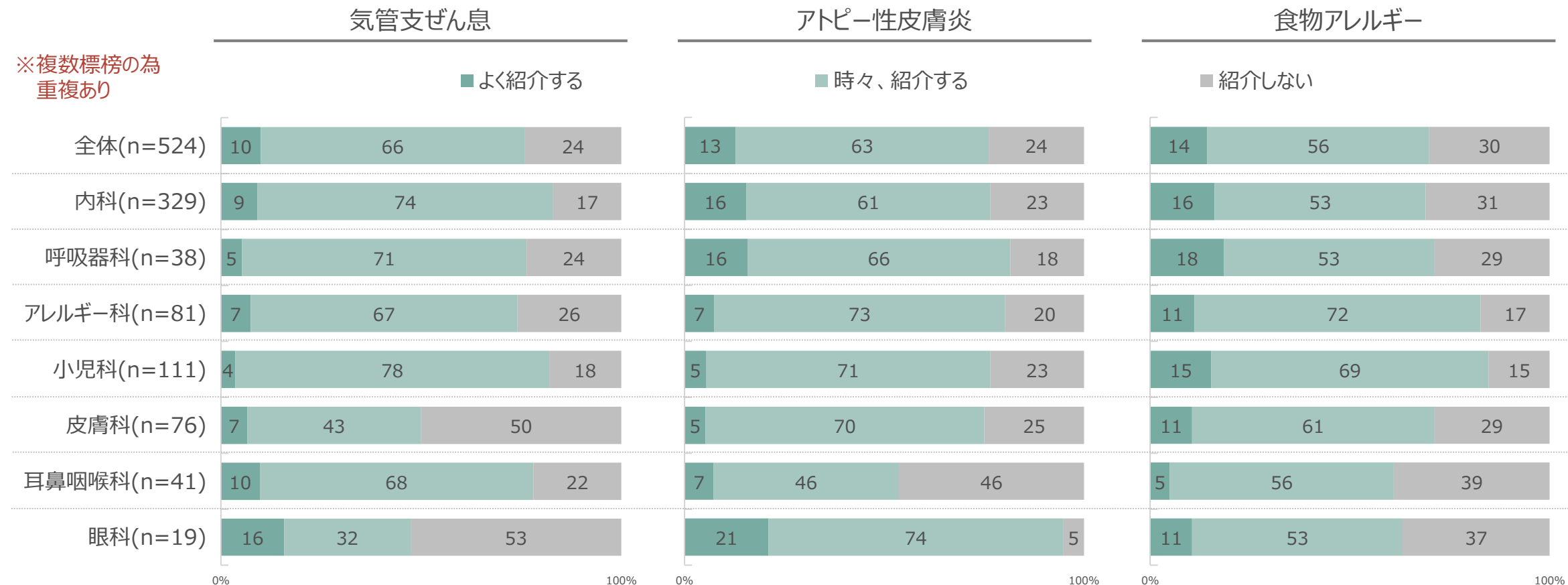
Q2. 貴院においてアレルギー疾患の診療等に関する医療従事者の配置状況についてお教えてください。

Ⅲ- i b. 医師Summary

Summary①-1

他の医療機関への患者の紹介状況（全医師）

▶ 大阪府で各アレルギー疾患をもつ患者さんを診療している医師のうち、患者さんを「よく紹介する」割合は、気管支ぜん息で10%、アトピー性皮膚炎で13%、食物アレルギーで14%であった。

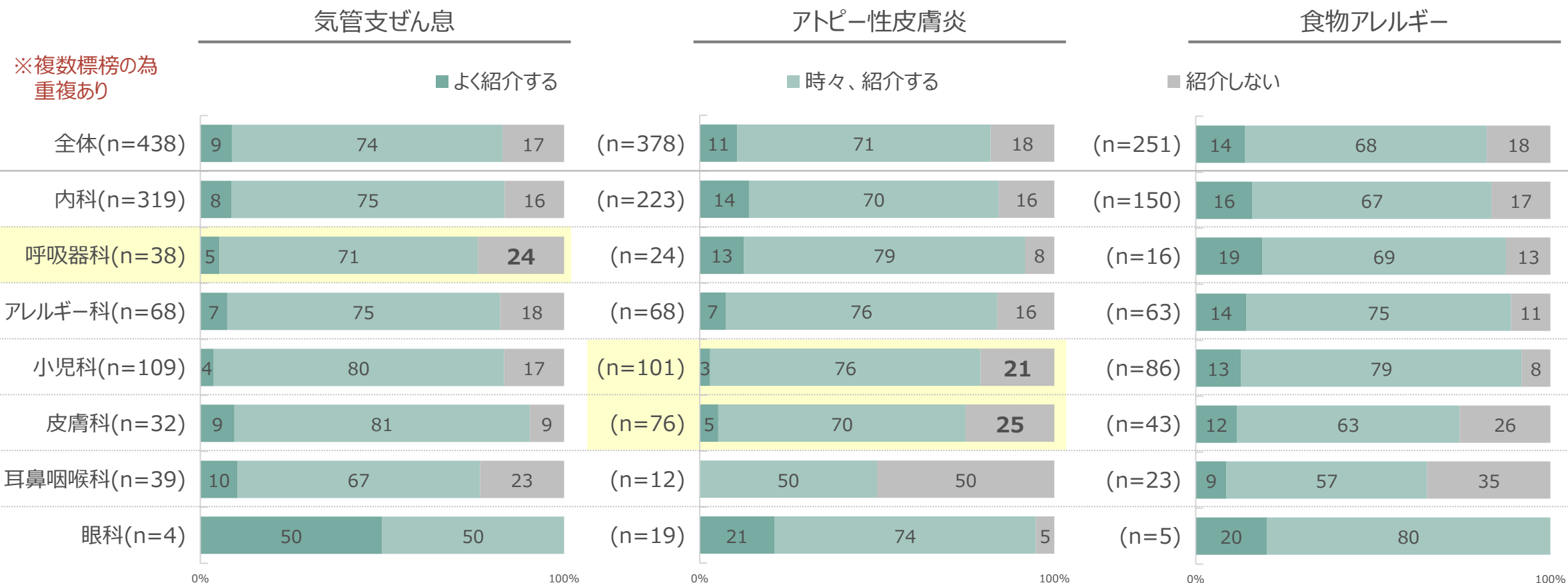


Q5. 貴院における他の医療機関との患者の紹介・逆紹介の状況をお教えてください。（それぞれひとつだけ）

Summary①-2

他の医療機関への患者の紹介状況（各アレルギー疾患を診療する医師）

- ▶ 現在各アレルギー疾患の診療を行っている医師に限定した場合でも、紹介状況に大きな傾向の差異は見られなかった。
- ▶ 呼吸器科では気管支ぜん息を、小児科、皮膚科ではアトピー性皮膚炎を「紹介しない」患者割合が高かった。

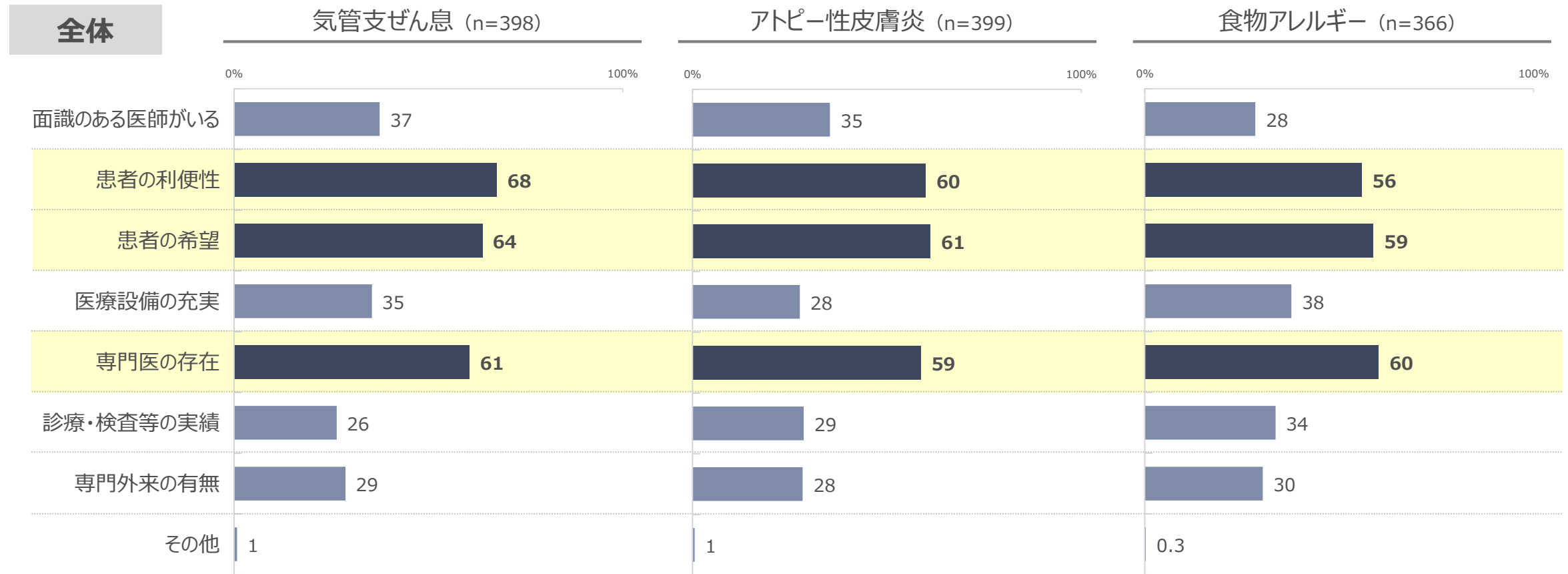


Q5. 貴院における他の医療機関との患者の紹介・逆紹介の状況をお教えてください。（それぞれひとつだけ）
 ※各アレルギー疾患を診療する医師のみ

Summary②

アレルギー疾患患者を紹介する際に重視すること

- アレルギー疾患患者を紹介する際に重視することとして、いずれのアレルギー疾患についても、「患者の利便性」、「患者の希望」、「専門医の存在」を挙げる医師割合が高かった。
- 他のアレルギー疾患と比較して、アトピー性皮膚炎では「医療設備の充実」、食物アレルギーでは「面識のある医師がいる」を挙げる医師割合が低かった。

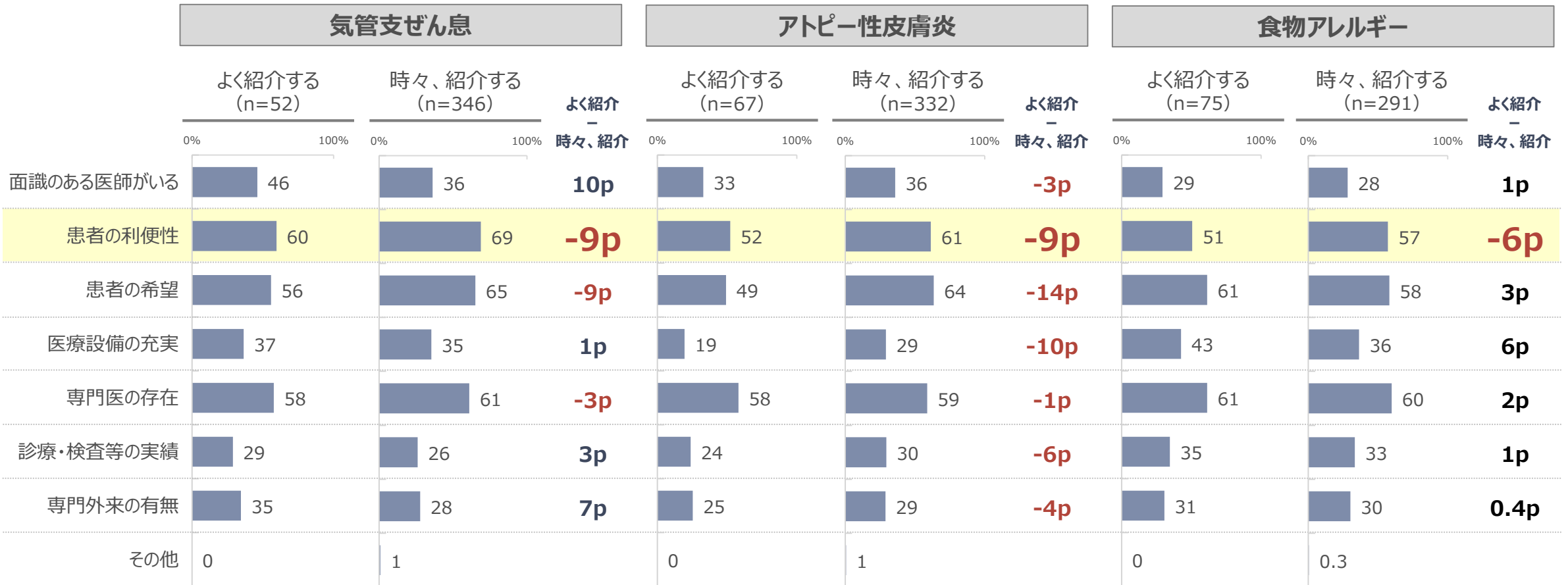


Q6. 紹介する医療機関は、どのようなことを考慮して決めますか。あてはまるものをすべてお選びください。（複数回答可）
 ※各アレルギー疾患患者を紹介することがある医師のみ

Summary③

アレルギー疾患患者を紹介する際に重視すること（患者紹介状況別）

➤ いずれのアレルギー疾患についても、患者を「時々、紹介する」医師は、「よく紹介する」医師と比較して、「患者の利便性」を重視する傾向にあった。

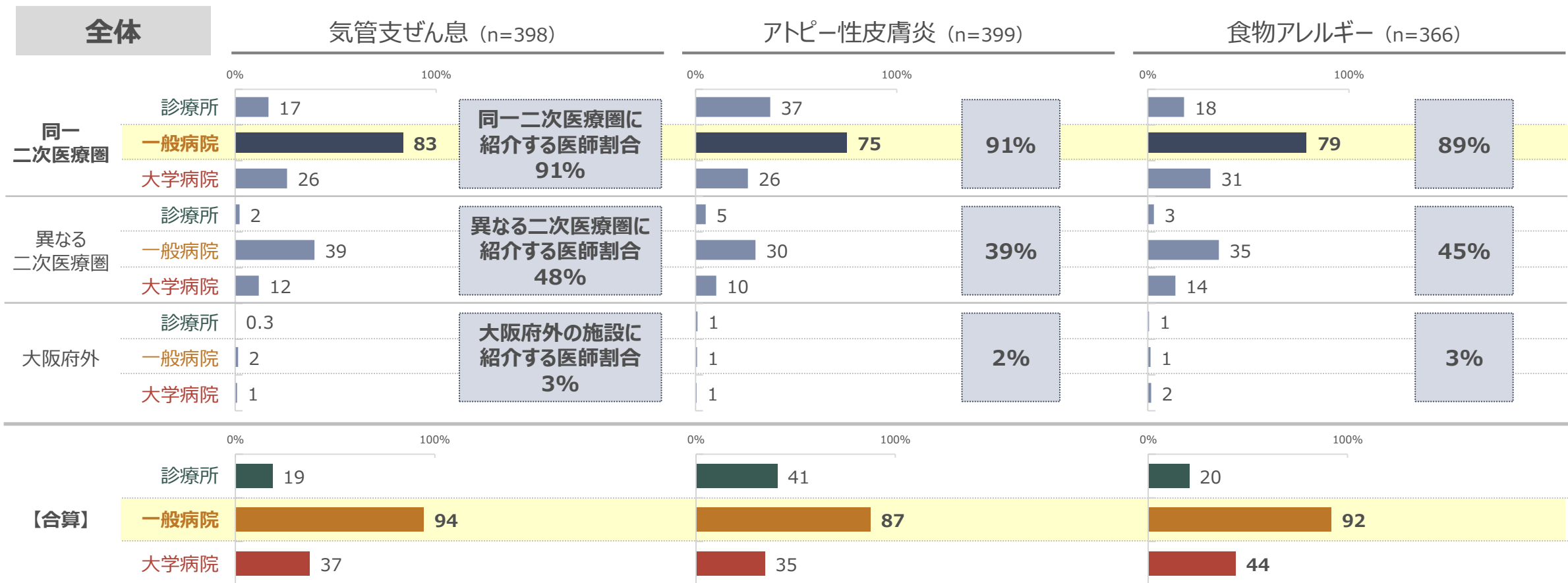


Q6. 紹介する医療機関は、どのようなことを考慮して決めますか。あてはまるものをすべてお選びください。（複数回答可）
 ※各アレルギー疾患患者を紹介することがある医師のみ

Summary④

アレルギー疾患患者の紹介先（上位2つ）

- アレルギー疾患患者の紹介先として最も割合が高かったのは、いずれのアレルギー疾患でも「同一二次医療圏の一般病院」であった。
- 二次医療圏別にみると、紹介先として最も多いのは「同一二次医療圏」、施設形態別にみると、紹介先として最も多いのは「一般病院」であった。
- 食物アレルギーについては、他の疾患と比較して、診療所に紹介する割合が低く、大学病院に紹介する割合が高かった。



Q7. 貴院において紹介したことがある医療機関の地域について、上位2つをお選びください。（複数回答可）
 ※各アレルギー疾患患者を紹介することがある医師のみ

Summary⑤-1

気管支ぜん息患者の紹介先（上位2つ）

▶ 気管支ぜん息患者の紹介先について、呼吸器科では、他の診療科と比較して「異なる二次医療圏」に紹介する割合が高かった。

気管支ぜん息

標榜診療科

標榜診療科		内科	呼吸器科	アレルギー科	小児科	皮膚科	耳鼻咽喉科	眼科
n		n=273	n=29	n=60	n=91	n=38	n=32	n=9
紹介先の 医療圏	同一二次医療圏	91%	83%	85%	93%	84%	94%	100%
	異なる二次医療圏	52%	66%	55%	53%	42%	25%	56%
	大阪府外の施設	4%	7%	7%	2%	3%	0%	0%
紹介先の 施設	診療所	14%	7%	17%	10%	16%	44%	33%
	一般病院	96%	97%	93%	98%	95%	88%	78%
	大学病院	38%	41%	42%	34%	58%	28%	33%

Q7. 貴院において紹介したことがある医療機関の地域について、上位2つをお選びください。（複数回答可）

※気管支ぜん息患者を紹介することがある医師のみ

※複数標榜の為重複あり

Summary⑤-2

アトピー性皮膚炎患者の紹介先（上位2つ）

▶ アトピー性皮膚炎患者の紹介先について、皮膚科では、他の診療科と比較して大学病院に紹介する割合が高かった。

アトピー性皮膚炎

標榜診療科

標榜診療科		内科	呼吸器科	アレルギー科	小児科	皮膚科	耳鼻咽喉科	眼科
n		n=252	n=31	n=65	n=85	n=57	n=22	n=18
紹介先の 医療圏	同一二次医療圏	92%	87%	82%	88%	86%	95%	100%
	異なる二次医療圏	39%	58%	55%	49%	47%	23%	22%
	大阪府外の施設	2%	0%	6%	1%	2%	5%	0%
紹介先の 施設	診療所	43%	35%	26%	32%	12%	45%	56%
	一般病院	90%	97%	86%	93%	88%	77%	83%
	大学病院	31%	35%	45%	29%	68%	32%	44%

Q7. 貴院において紹介したことがある医療機関の地域について、上位2つをお選びください。（複数回答可）

※アトピー性皮膚炎患者を紹介することがある医師のみ

※複数標榜の為重複あり

Summary⑤-3

食物アレルギー患者の紹介先（上位2つ）

▶ 食物アレルギー患者の紹介先として、アレルギー科では、他の診療科と比較して「異なる二次医療圏」に紹介する医師割合が高かった。

食物アレルギー

標榜診療科

標榜診療科		内科	呼吸器科	アレルギー科	小児科	皮膚科	耳鼻咽喉科	眼科
n		n=227	n=27	n=67	n=94	n=54	n=25	n=12
紹介先の医療圏	同一二次医療圏	90%	81%	81%	88%	85%	88%	100%
	異なる二次医療圏	46%	59%	64%	52%	48%	32%	42%
	大阪府外の施設	3%	4%	10%	6%	4%	0%	0%
紹介先の施設	診療所	19%	15%	12%	14%	9%	24%	42%
	一般病院	93%	96%	91%	97%	91%	92%	75%
	大学病院	44%	52%	48%	35%	65%	44%	33%

Q7. 貴院において紹介したことがある医療機関の地域について、上位2つをお選びください。（複数回答可）

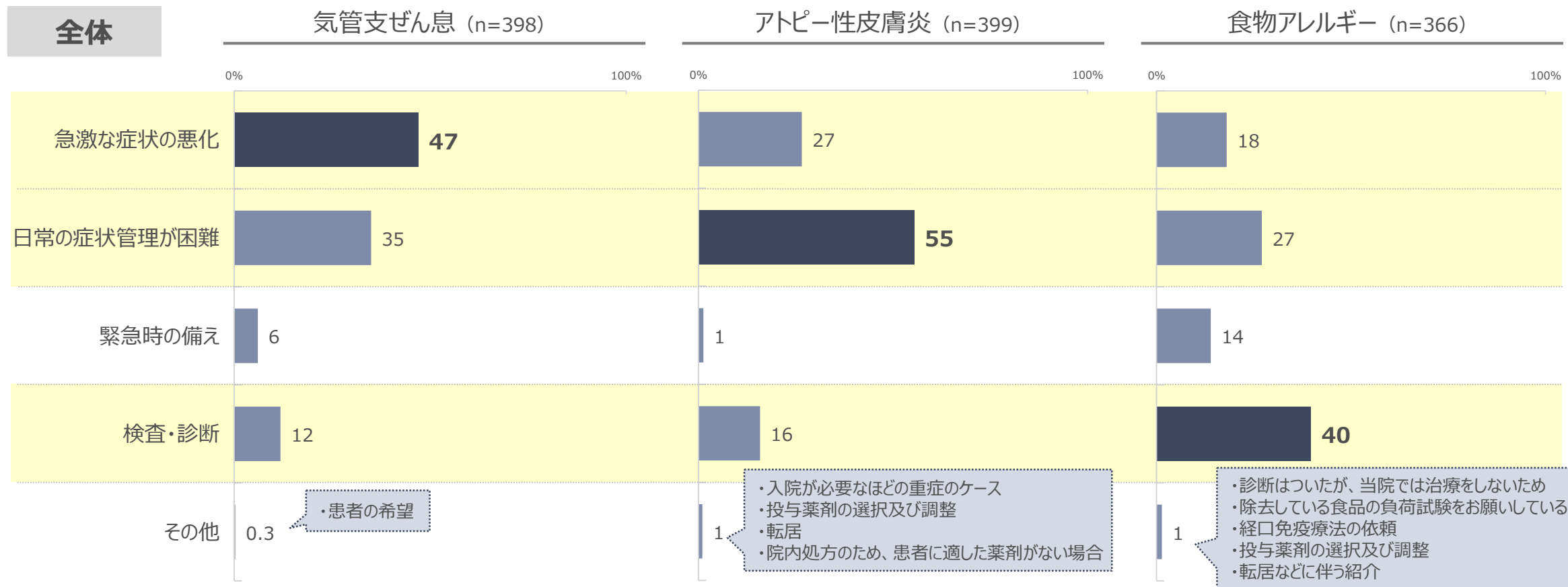
※食物アレルギー患者を紹介することがある医師のみ

※複数標榜の為重複あり

Summary⑥

患者を紹介する理由

▶ アレルギー疾患患者を紹介する理由として最も割合が高かったのは、気管支ぜん息で「急激な症状の悪化」47%、アトピー性皮膚炎で「日常の症状管理が困難」55%、食物アレルギーで「検査・診断」40%と、アレルギー疾患ごとに患者を紹介する主な理由が異なっていた。

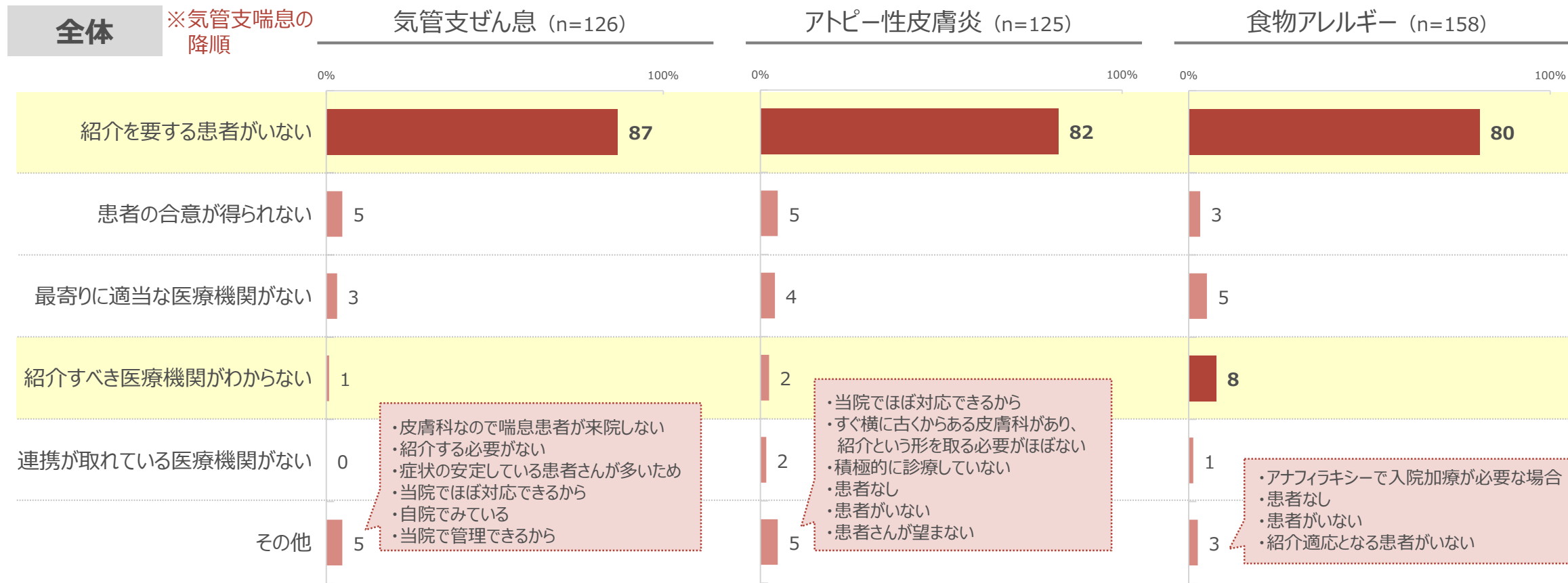


Q8. 患者を紹介する理由で最も多いものをお選びください。(ひとつだけ)
 ※各アレルギー疾患患者を紹介することがある医師のみ

Summary⑦

患者を紹介しない・できない理由

- アレルギー疾患患者を紹介しない・できない理由としては、いずれのアレルギー疾患についても「紹介を要する患者がいない」の割合が最も高かった。
- 食物アレルギーについて、他の疾患と比較して、「紹介すべき医療機関がわからない」を選択した医師割合が高かった。

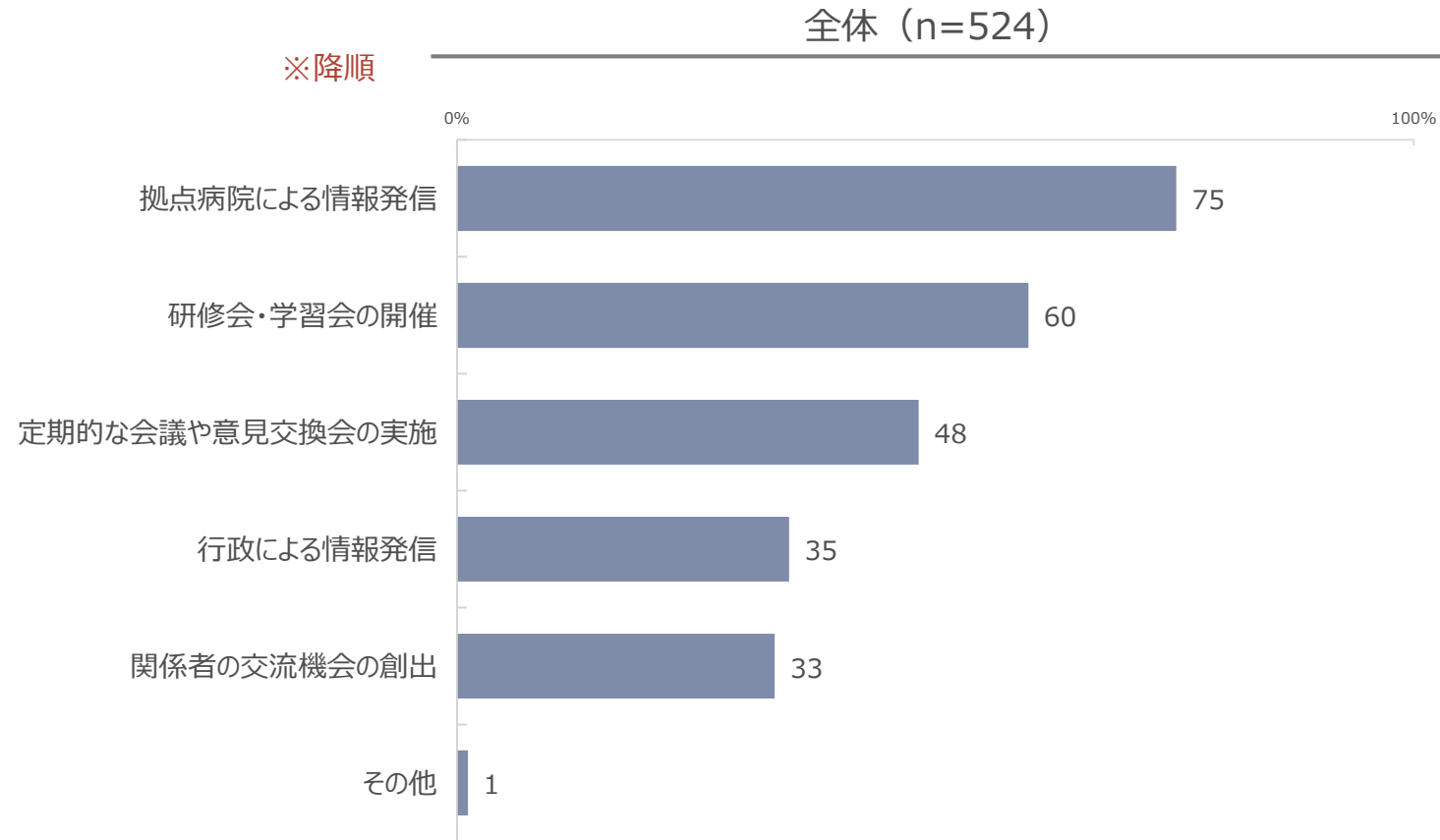


Q9. 患者を紹介しない、できない理由で最も多いものをお選びください。(ひとつだけ)
 ※各アレルギー疾患患者を紹介しない医師のみ

Summary⑧

地域における医療提供体制整備のために必要だと考えること

- ▶ 大阪府でアレルギー疾患をもつ患者さんを診療している医師が、地域における医療提供体制整備の為に必要だと考えることとして最も割合が高いのは「拠点病院による情報発信」75%。続いて、「研修会・学習会の開催」60%、「定期的な会議や意見交換会の実施」48%であった。



Q12. 地域において診療連携体制を構築するためにはどのような事が必要と思われますか。(複数回答可)

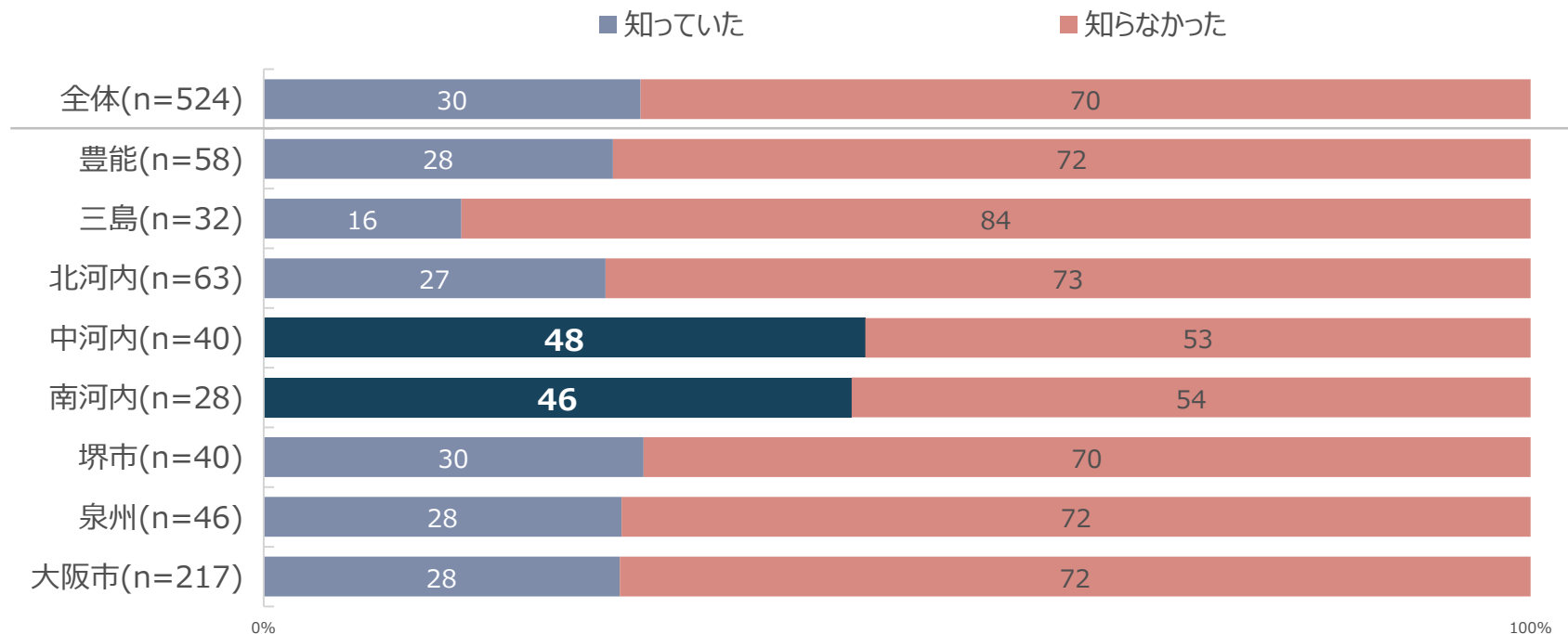
Summary⑨-1

大阪府が医療提供体制整備を進めていることに対する認知度

- 大阪府が医療提供体制の整備を進めていることを認知している医師割合は30%であった。
- 中河内、南河内では、他の二次医療圏として認知率が高い一方で、三島では認知率が低かった。

<アレルギー疾患医療拠点病院>

「アレルギー疾患医療拠点病院」とは、アレルギー疾患対策基本法に基づき、国民が居住する地域に関わらず、等しくそのアレルギーの状態に応じて適切なアレルギー疾患医療を受けることができるよう、アレルギー疾患医療の拠点となる病院です。大阪府では、平成30年6月に近畿大学病院、大阪はいびきの医療センター、関西医科大学附属病院、大阪赤十字病院が指定され、診療連携体制の構築を進めています。



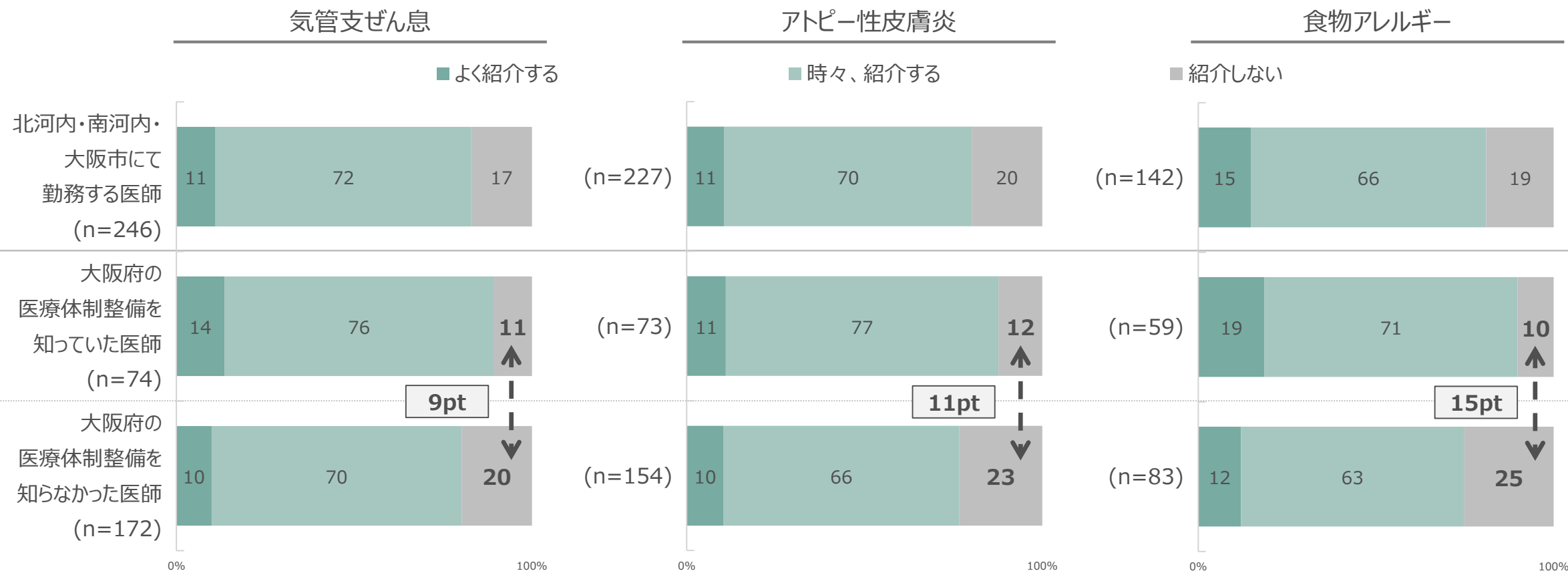
Q11. 大阪府がアレルギー疾患医療拠点病院を指定するなど医療提供体制整備を進めていることを知っていますか。

Summary⑨-2

他の医療機関への患者の紹介状況（北河内・南河内・大阪市）

➤ いずれの疾患についても、大阪府が医療体制整備をしていることを知っていた医師は、知らなかった医師と比較して、患者の紹介割合が高かった。中でも特に、食物アレルギーについては、知っている医師と知らなかった医師の患者紹介割合の差が大きかった。

アレルギー疾患医療拠点病院がある北河内・南河内・大阪市医療圏にて勤務する医師のうち、各アレルギー疾患を診療する医師のみに限定して集計



Q5. 貴院における他の医療機関との患者の紹介・逆紹介の状況をお教えてください。(それぞれひとつだけ)
 ※北河内・南河内・大阪市医療圏にて勤務する、各アレルギー疾患を診療する医師のみ

Summary^⑩

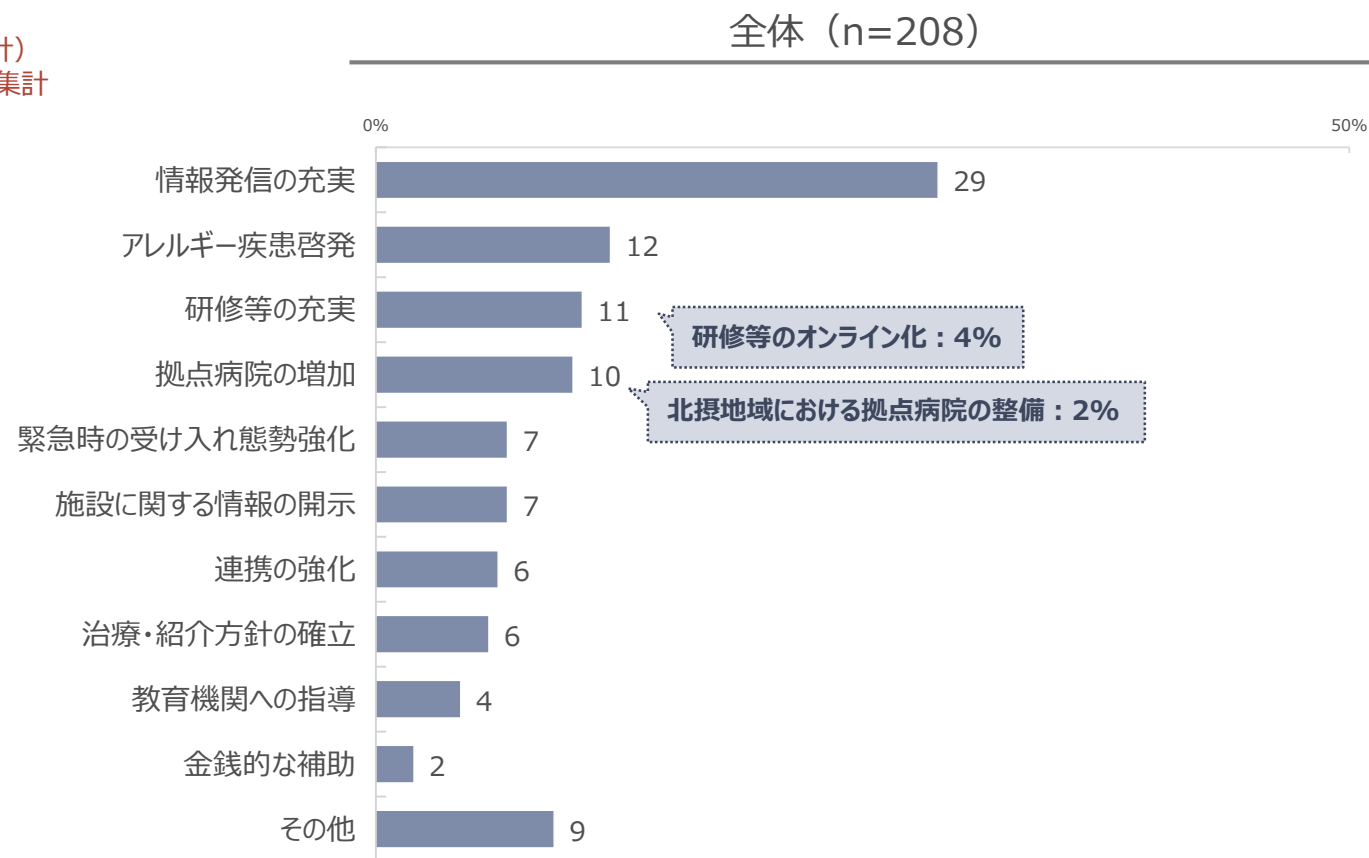
大阪府のアレルギー疾患対策に関する要望

- ▶ 大阪府のアレルギー疾患対策についての要望として最も挙がっていたのは「情報発信の充実」。続いて、「アレルギー疾患啓発」、「研修等の充実」、「拠点病院の増加」、「緊急時の受け入れ態勢」、「施設に関する情報の開示」であった。
- ▶ 「拠点病院の増加」の中でも、特に「北摂地域における拠点病院の整備」と回答していた医師が一定程度存在した。

※アフターコーディング

(自由回答を同じ内容ごとに分類して集計)

※「特になし」旨を回答した316sを除いて集計



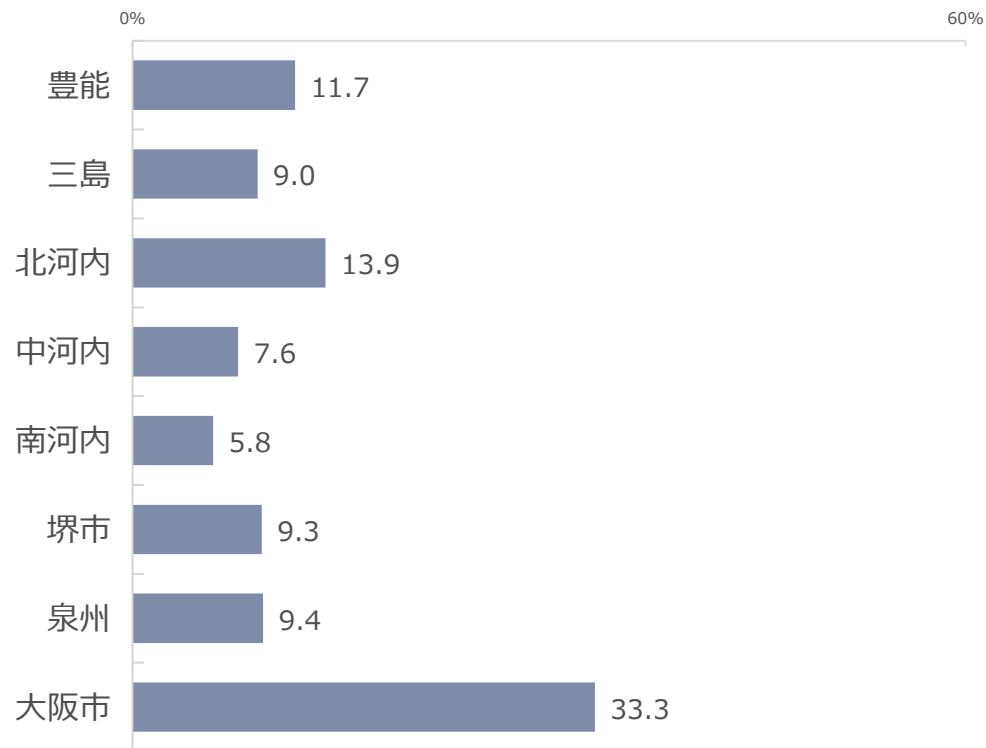
Q16. 大阪府のアレルギー疾患対策について、ご要望がありましたらお聞かせください。

Ⅲ- ii. 患者調査

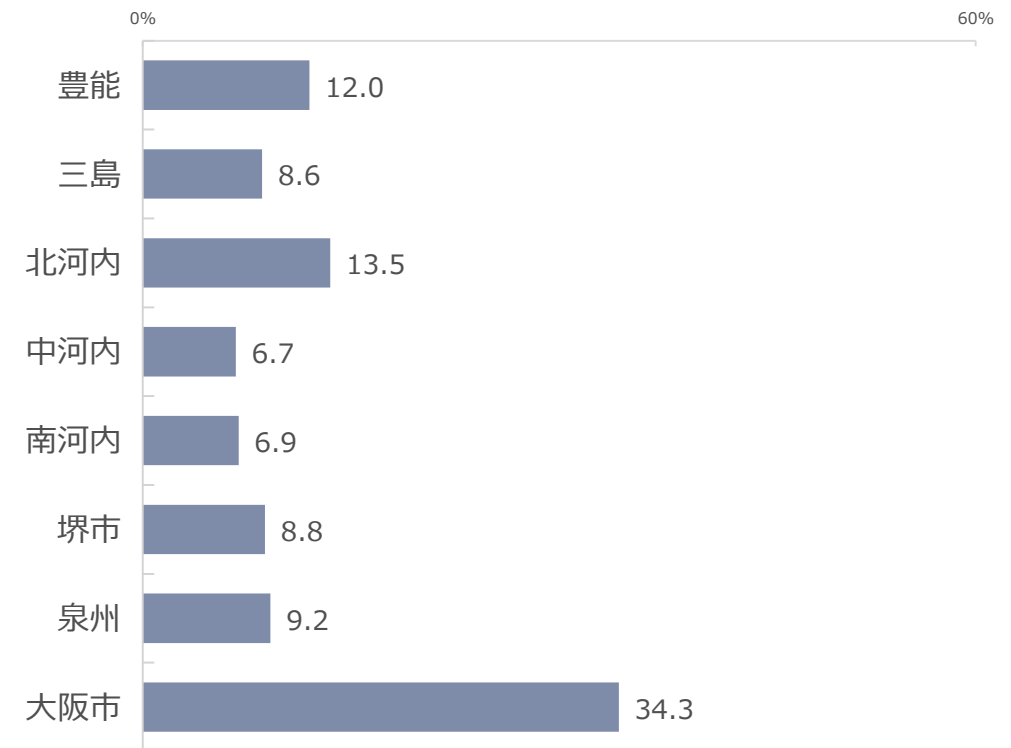
Ⅲ- ii a. 属性情報

二次医療圏ごとの居住地／通院先施設

調査回答者の居住地比率 (n=1000)



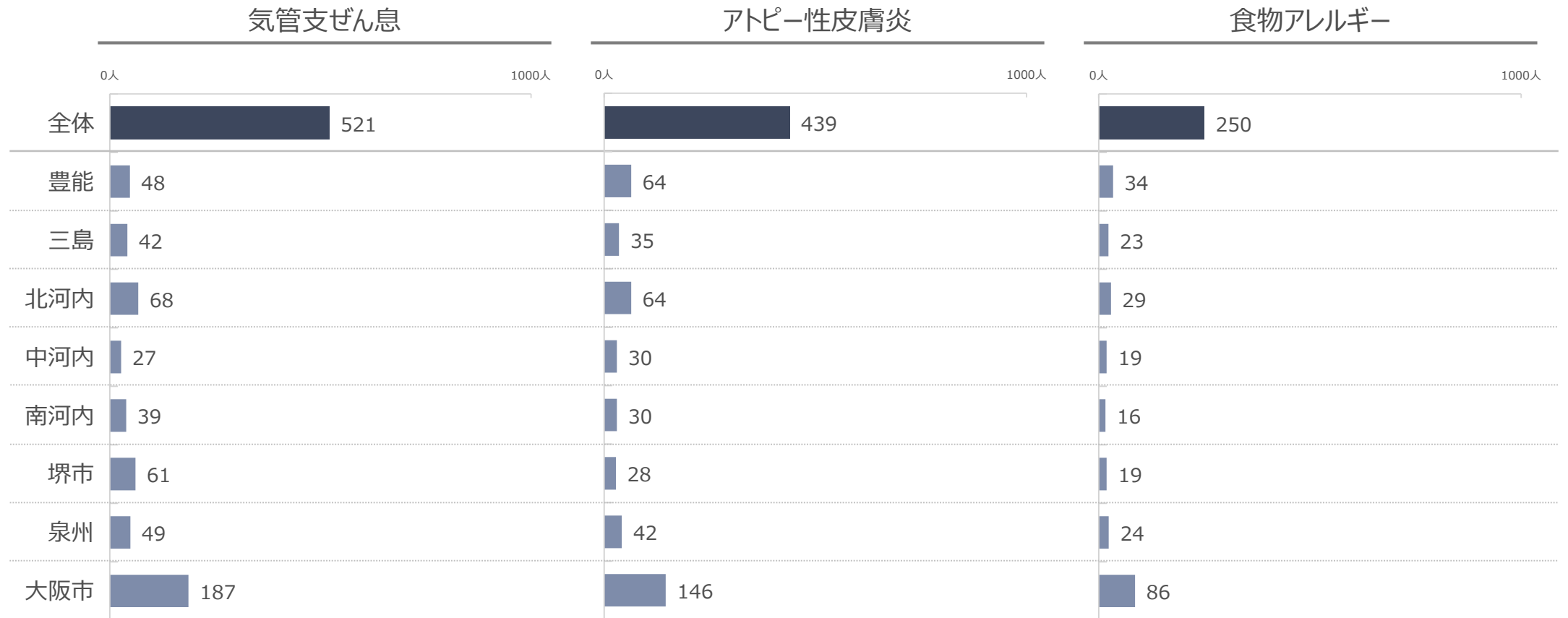
調査回答者の通院先施設比率 (n=1000)



SC3-2. 受診されている医療機関がある市区町村を教えてください。(ひとつだけ)
Q3-2. お住まいの市区町村を教えてください。(ひとつだけ)

各アレルギー疾患の罹患患者数

✓ 調査対象1,000人のうち、気管支ぜん息の患者数は521人、アトピー性皮膚炎の患者数は439人、食物アレルギーの患者数は250人であった。

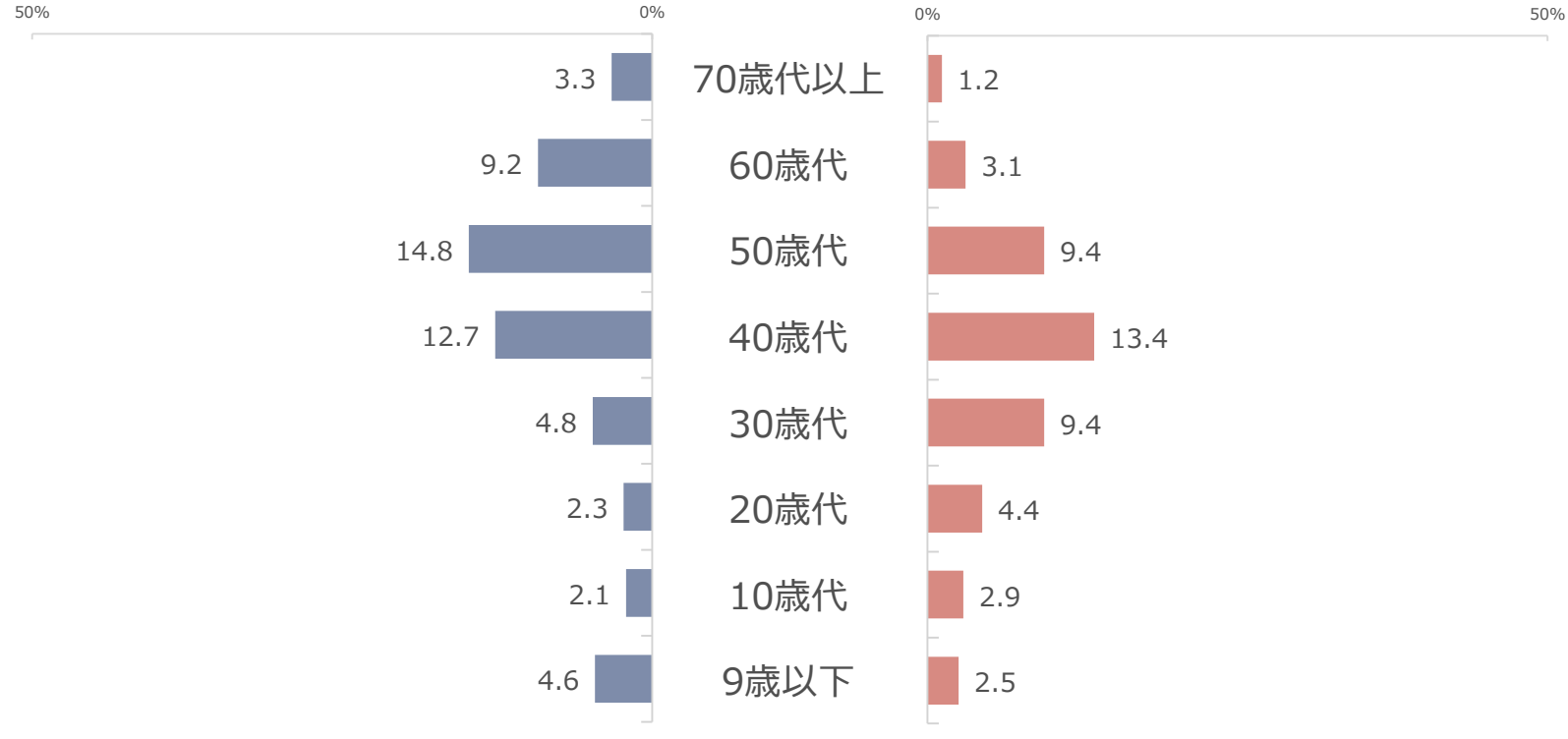


SC1. ご自身についてお聞きします。現在、医療機関で治療中のアレルギー疾患について教えてください。（複数回答可）
 SC2. お子さんについてお聞きします。現在、医療機関で治療中のアレルギー疾患について教えてください。（複数回答可）

【気管支ぜん息】 性別年代ごとの患者内訳（人口ピラミッド）

✓ 気管支ぜん息患者のうち最も割合が高い性別・年代は、50代男性で14.8%。続いて、40代女性で13.4%、40代男性で12.7%であった。

気管支ぜん息をもつ患者全体を100とした場合の内訳（n=521）

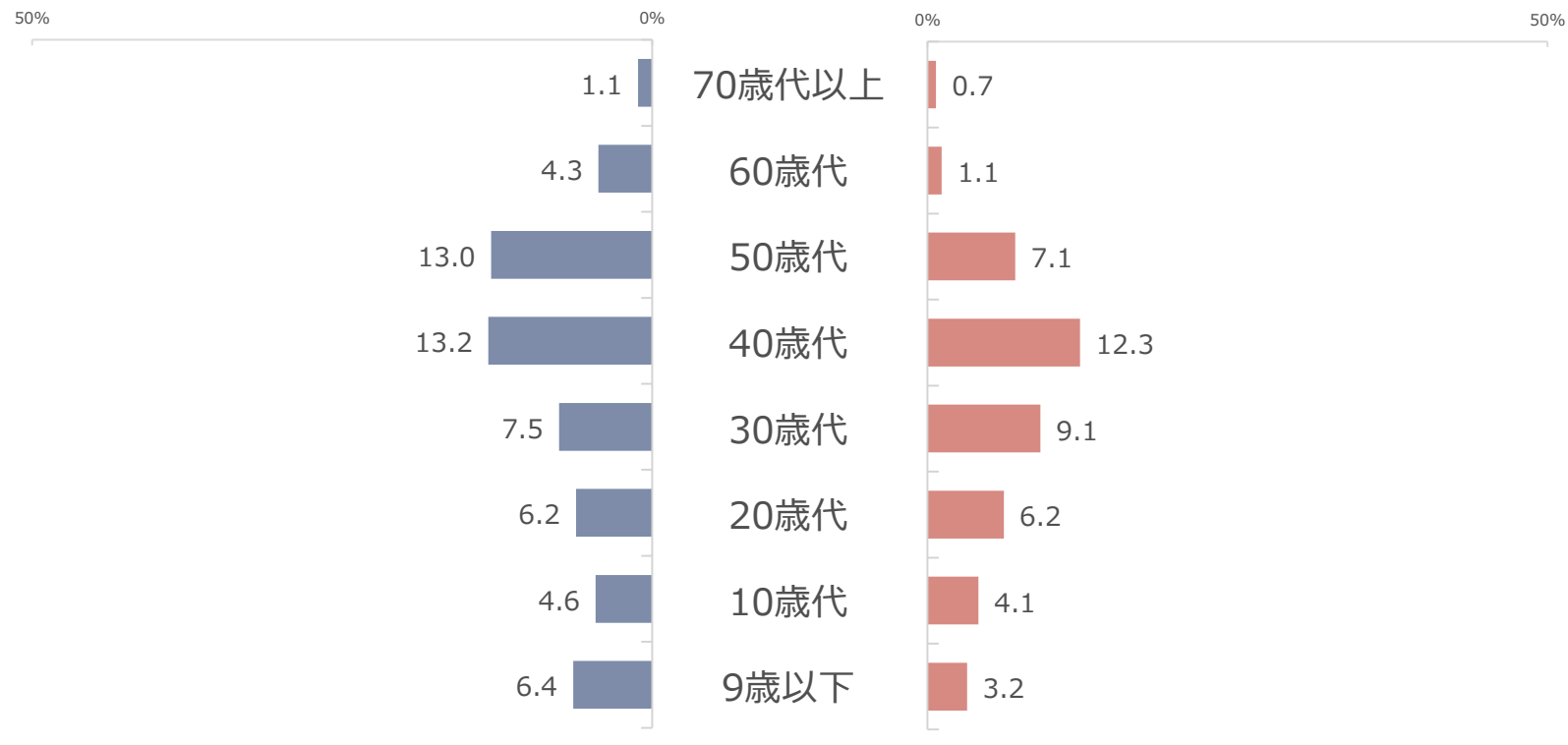


SC1. ご自身についてお聞きます。現在、医療機関で治療中のアレルギー疾患について教えてください。（複数回答可）
 SC2. お子さんについてお聞きます。現在、医療機関で治療中のアレルギー疾患について教えてください。（複数回答可）
 Q1. あなた（お子さん）の性別について教えてください。（ひとつだけ）
 Q2. あなた（お子さん）の年齢を教えてください。

【アトピー性皮膚炎】 性別年代ごとの患者内訳（人口ピラミッド）

✓ アトピー性皮膚炎患者のうち最も割合が高い性別・年代は、40代男性で13.2%。続いて、50代男性で13.0%、40代女性で12.3%であった。

アトピー性皮膚炎をもつ患者全体を100とした場合の内訳（n=439）

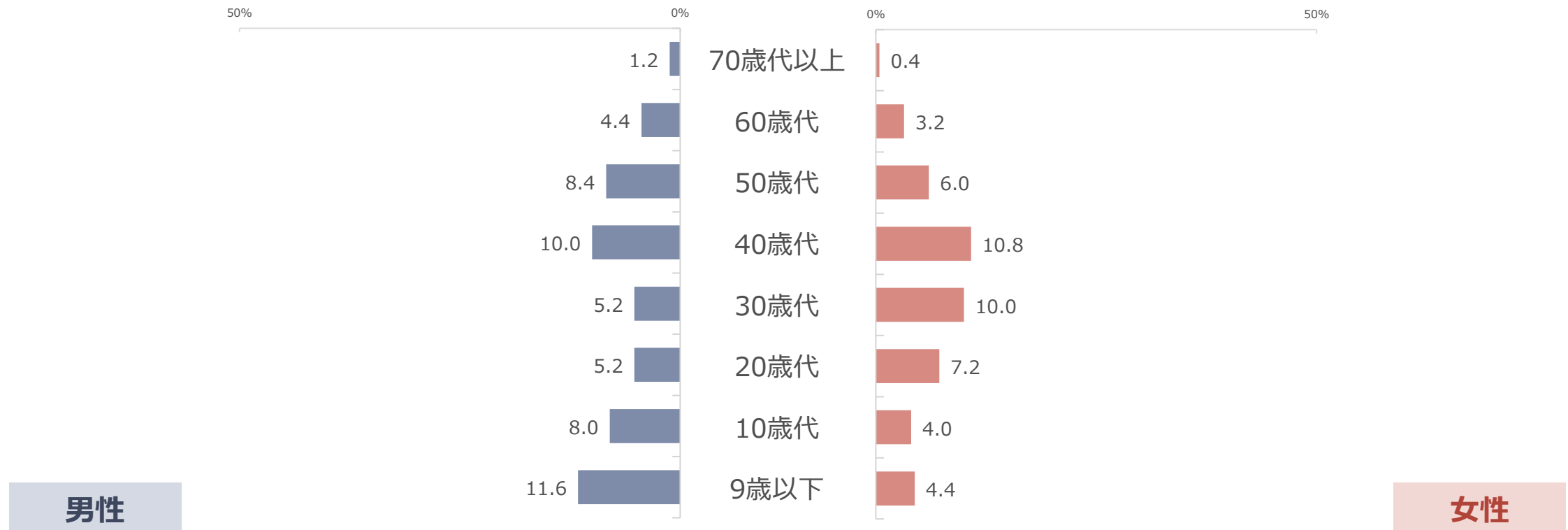


SC1. ご自身についてお聞きます。現在、医療機関で治療中のアレルギー疾患について教えてください。（複数回答可）
 SC2. お子さんについてお聞きます。現在、医療機関で治療中のアレルギー疾患について教えてください。（複数回答可）
 Q1. あなた（お子さん）の性別について教えてください。（ひとつだけ）
 Q2. あなた（お子さん）の年齢を教えてください。

【食物アレルギー】 性別年代ごとの患者内訳（人口ピラミッド）

✓ 食物アレルギー患者のうち最も割合が高い性別・年代は、9歳以下の男性で11.6%。続いて、40代女性で10.8%、40代男性、30代女性で共に10.0%であった。

食物アレルギーをもつ患者全体を100とした場合の内訳（n=250）



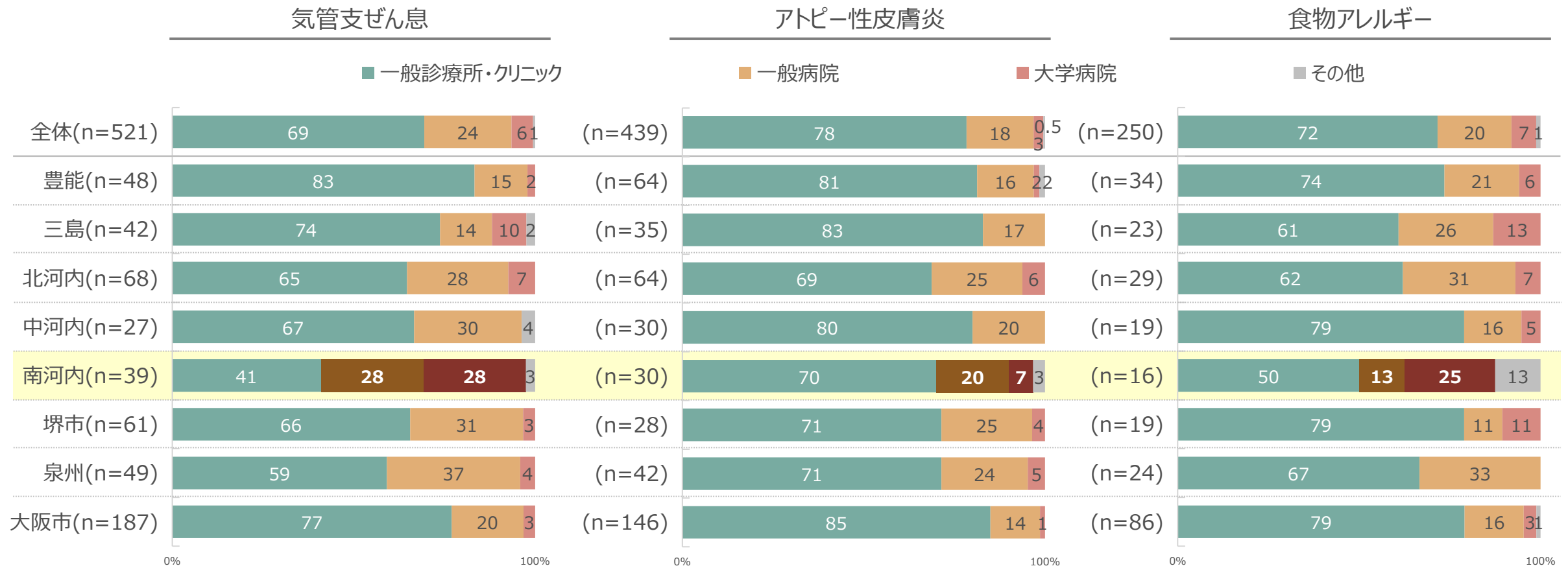
SC1. ご自身についてお聞きます。現在、医療機関で治療中のアレルギー疾患について教えてください。（複数回答可）
 SC2. お子さんについてお聞きます。現在、医療機関で治療中のアレルギー疾患について教えてください。（複数回答可）
 Q1. あなた（お子さん）の性別について教えてください。（ひとつだけ）
 Q2. あなた（お子さん）の年齢を教えてください。

Ⅲ- ii b. 患者Summary

Summary①

受診している医療機関の施設形態内訳

- いずれのアレルギー疾患についても、最も受診している患者割合が高い施設は一般診療所・クリニック。続いて一般病院であった。
- 食物アレルギーについては、他の疾患と比較して、大学病院にて受診している患者割合が高い傾向にあった。
- 南河内では、他の二次医療圏と比較して、大学病院にて受診している患者割合が高い傾向にあった。

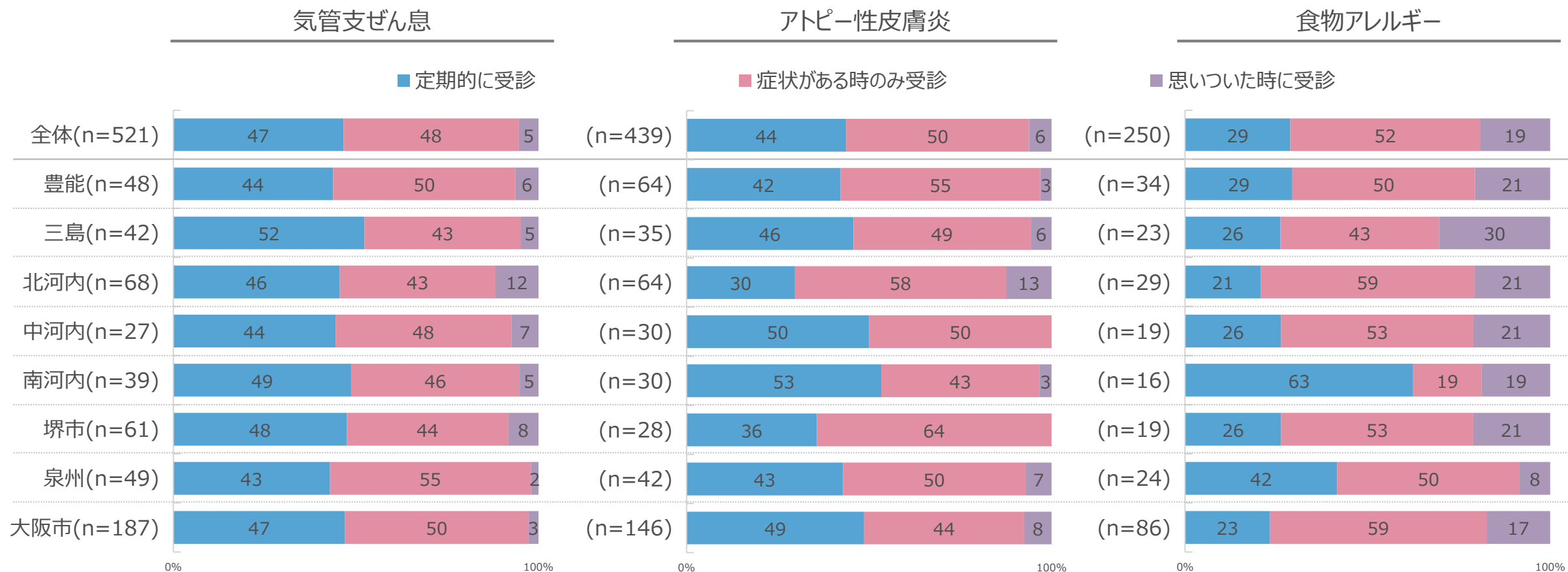


Q4. あなたが、現在受診している医療機関についてお答えください。(それぞれひとつだけ)
 ※各アレルギー疾患に罹患している患者のみ

Summary②

医療機関の受診頻度

- 医療機関の受診頻度について、いずれのアレルギー疾患でも、最も割合が高いのは「症状があるときのみ受診」であった。
- 食物アレルギーは、他の疾患と比較して、「定期的に受診」の割合が低い一方で、「思いついた時に受診」の割合が高かった。
- 南河内では、他の二次医療圏と比較して、食物アレルギーを「定期的に受診」する患者割合が高く、63%であった。



Q5. 医療機関の受診についてお答えください。(ひとつだけ)

Q8. 医療機関の受診についてお答えください。(ひとつだけ)

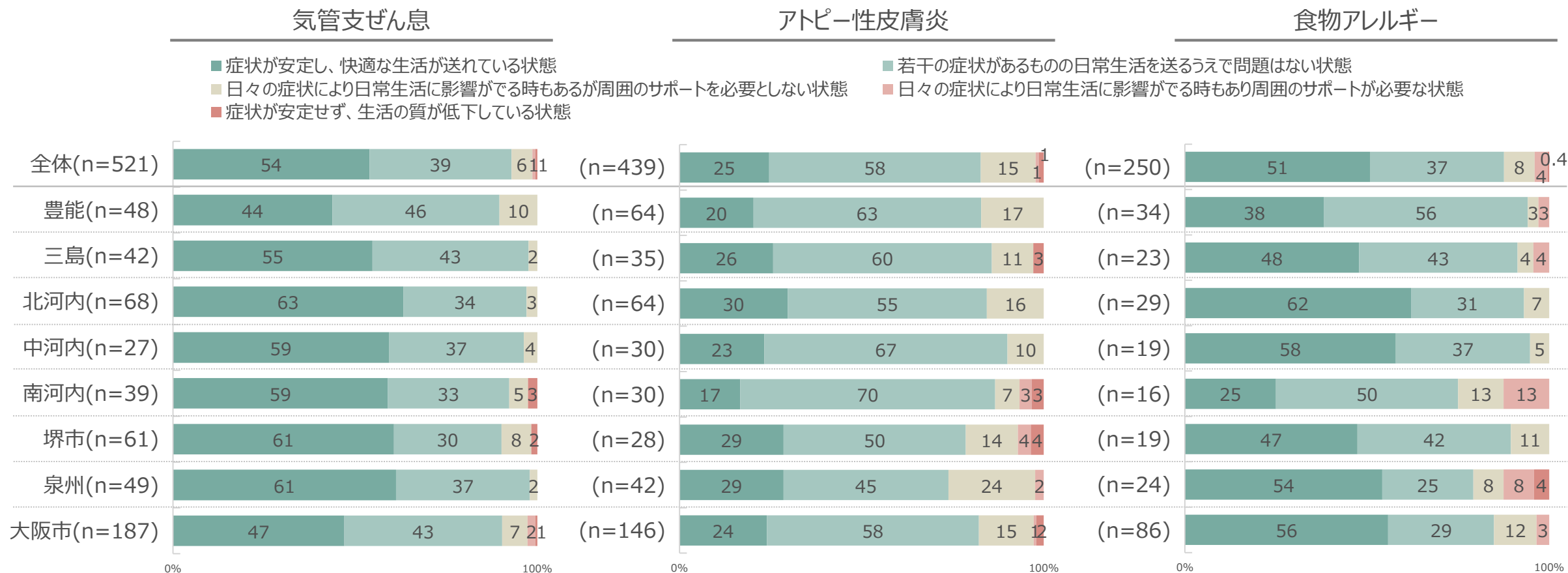
Q11. 医療機関の受診についてお答えください。(ひとつだけ)

※各アレルギー疾患に罹患している患者のみ

Summary③

アレルギー疾患の症状の度合い

▶ 気管支ぜん息、食物アレルギーについては「症状が安定し、快適な生活が送れている状態」の患者割合が最も高いのに対して、アトピー性皮膚炎については「若干の症状があるものの日常生活を送るうえで問題はない状態」の患者割合が最も高かった。

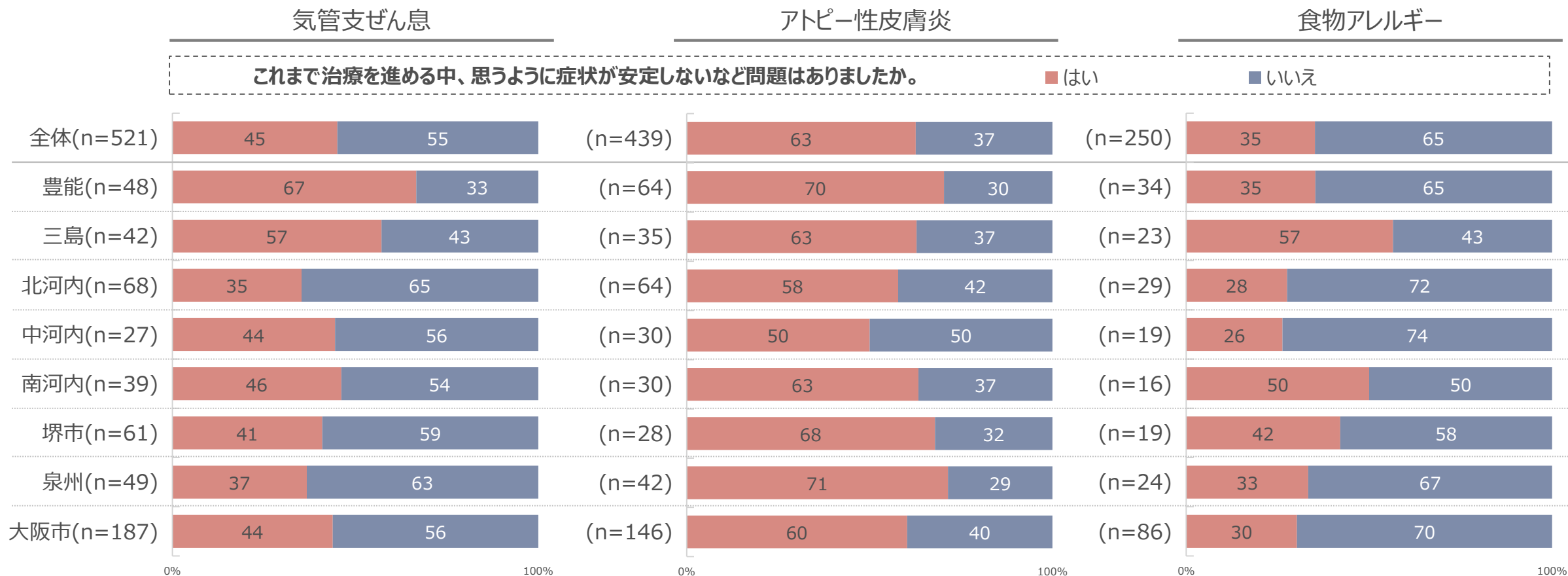


Q6. 現在の状態についてお答えください。(ひとつだけ)
 Q9. 現在の状態についてお答えください。(ひとつだけ)
 Q12. 現在の状態についてお答えください。(ひとつだけ)
 ※各アレルギー疾患に罹患している患者のみ

Summary④-1

治療を進める中で何かしらの問題が発生した患者割合

▶ 各アレルギー疾患患者のうち、治療を進める中で何かしらの問題が発生した割合は、気管支ぜん息患者で45%、アトピー性皮膚炎患者で63%、食物アレルギー患者で35%であった。



Q7-1. これまで治療を進める中、思うように症状が安定しないなど問題はありましたか。(ひとつだけ)

Q10-1. これまで治療を進める中、思うように症状が安定しないなど問題はありましたか。(ひとつだけ)

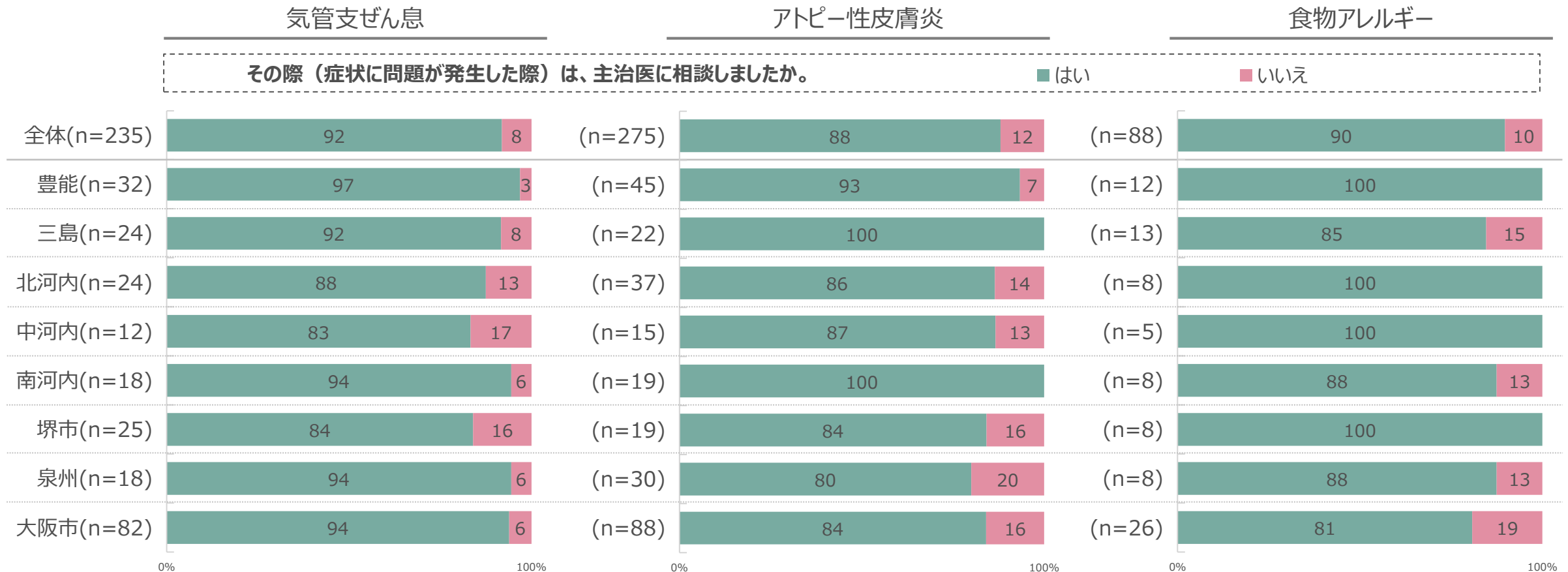
Q13-1. これまで治療を進める中、思うように症状が安定しないなど問題はありましたか。(ひとつだけ)

※各アレルギー疾患に罹患している患者のみ

Summary④-2

症状に問題が発生した際の主治医への相談状況

▶ 各アレルギー疾患について、症状に問題が発生した際に主治医に相談した患者割合は、気管支ぜん息で92%、アトピー性皮膚炎で88%、食物アレルギーで90%。



Q7-2. その際は、主治医に相談しましたか。(ひとつだけ)

Q10-2. その際は、主治医に相談しましたか。(ひとつだけ)

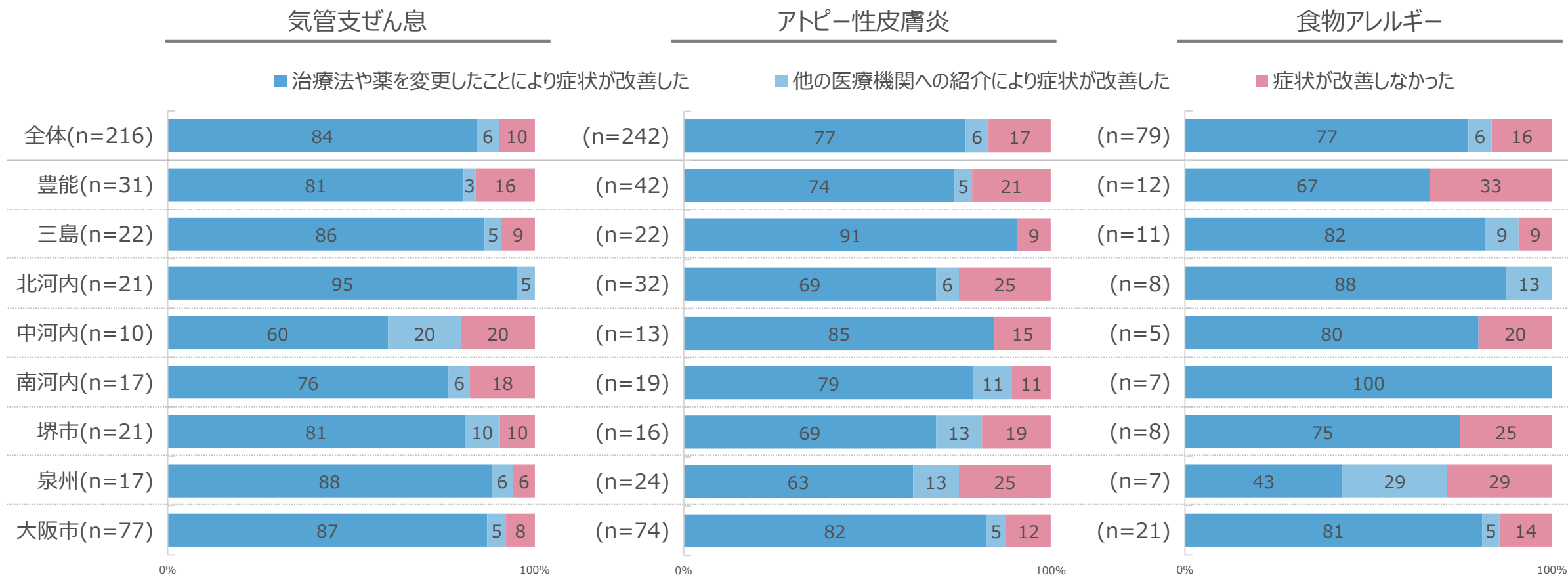
Q13-2. その際は、主治医に相談しましたか。(ひとつだけ)

※各アレルギー疾患にて症状が安定しないなどの問題があった患者のみ

Summary④-3

主治医に相談した場合の症状改善状況

▶ 各アレルギー疾患にて症状に問題が発生した際に主治医に相談した患者について、いずれのアレルギー疾患についても「治療法や薬を変更したことにより症状が改善した」患者割合が最も高かった。



Q7-3. 「主治医に相談した」と回答した方にお聞きします。相談した結果、症状は改善しましたか。(ひとつだけ)

Q10-3. 「主治医に相談した」と回答した方にお聞きします。相談した結果、症状は改善しましたか。(ひとつだけ)

Q13-3. 「主治医に相談した」と回答した方にお聞きします。相談した結果、症状は改善しましたか。(ひとつだけ)

※各アレルギー疾患にて症状が安定しないなど問題が発生した場合に、主治医に相談した患者のみ

Summary⑤-1

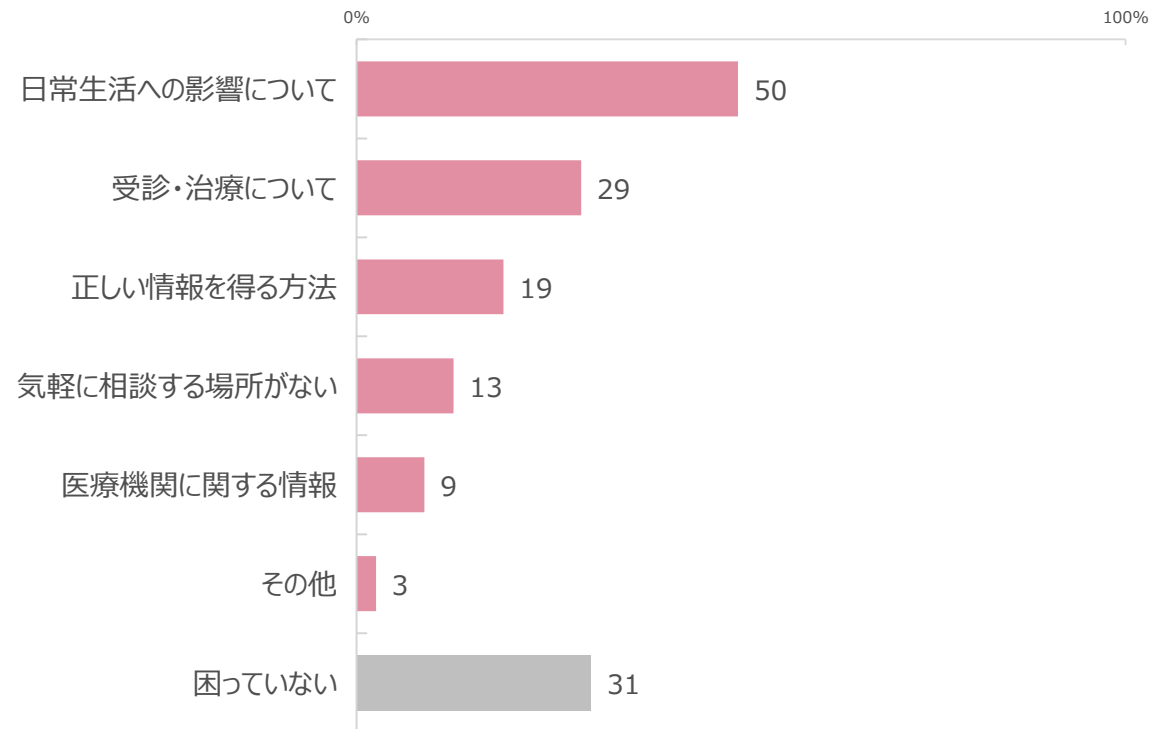
アレルギー疾患に対する考え方

- アレルギー疾患で困っていることとして最も割合が高かったのは「日常生活への影響について」50%。続いて、「受診・治療について」29%、「正しい情報を得る方法」19%。
- アレルギー疾患とつきあっていくうえで必要だと思う情報として最も割合が高いのは「治療方法に関する情報」69%。続いて、「医療機関に関する情報」59%、「薬品に関する情報」58%、「専門医などの情報」53%であった。

全体
(n=1000)

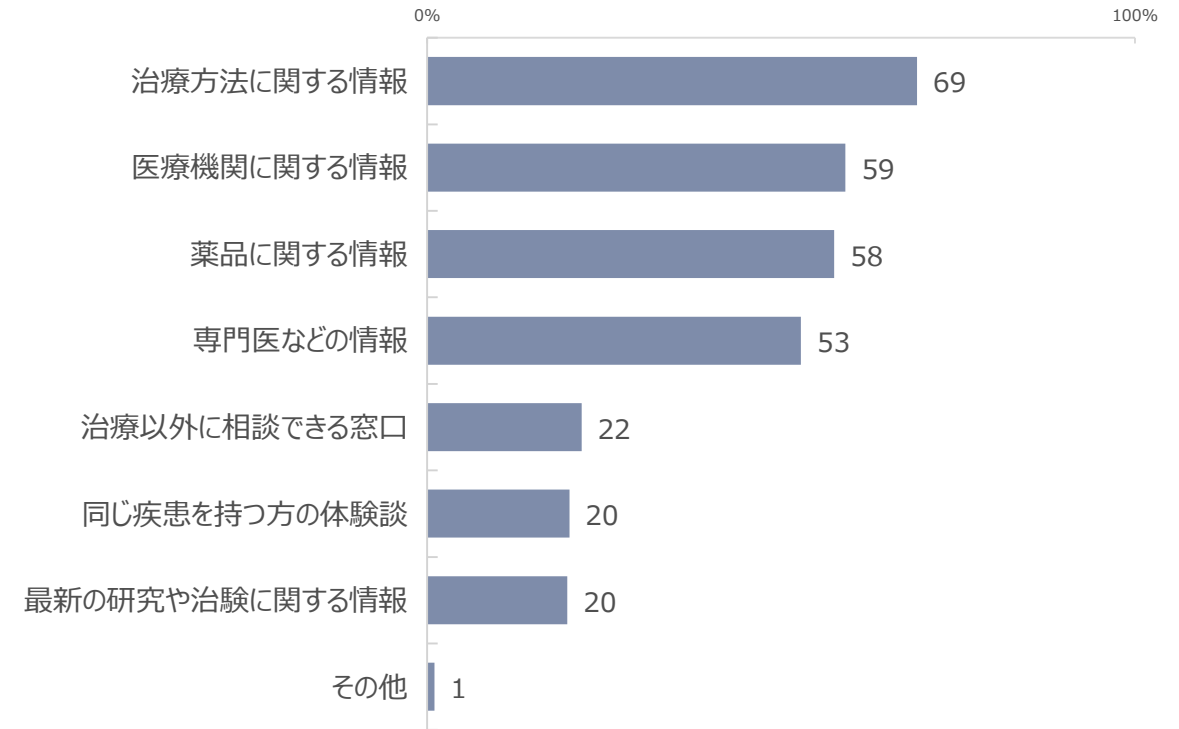
※降順

アレルギー疾患で困っていること



※降順

アレルギー疾患につきあっていくうえで必要だと思う情報



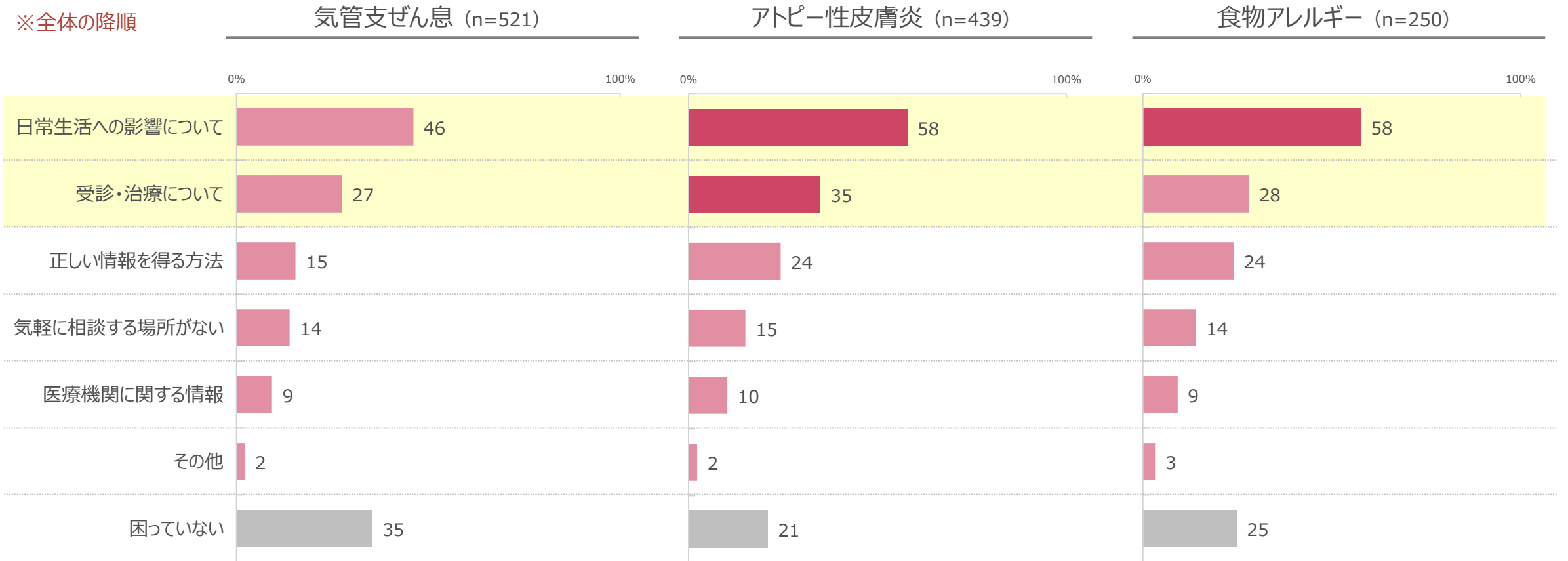
Q14. アレルギー疾患で困っていることは何ですか。(複数回答可)

Q16. アレルギー疾患と付きあっていくうえでどのような情報が必要だと思いますか。(複数回答可)

Summary⑤-2

アレルギー疾患で困っていること

- アレルギー疾患別にみると、アレルギー疾患で困っていることとして最も割合が高かったのは、いずれの疾患でも「日常生活への影響について」であった。
- アトピー性皮膚炎患者、食物アレルギー患者は、気管支ぜん息患者と比較して「日常生活への影響について」特に困っている割合が高かった。加えて、アトピー性皮膚炎患者は、他の疾患と比較して、「受診・治療について」困っている割合が高かった。



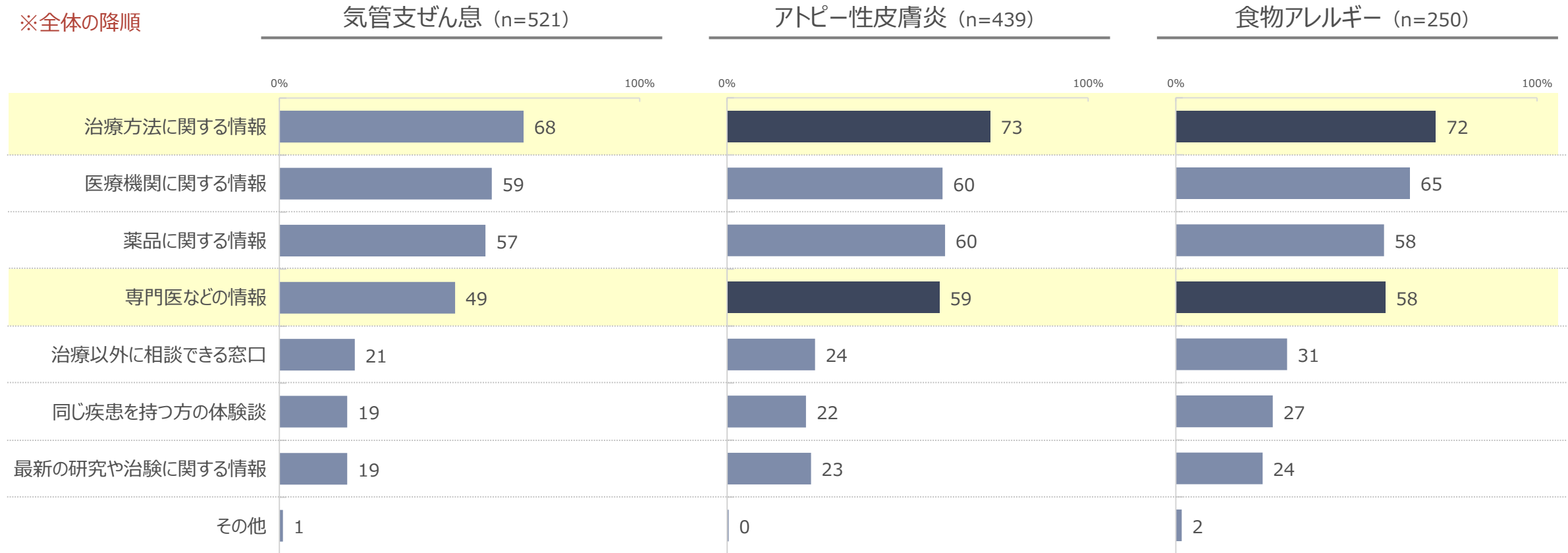
Q14. アレルギー疾患で困っていることは何ですか。(複数回答可)

Summary⑤-3

アレルギー疾患につきあっていくうえで必要だと思う情報

- アレルギー疾患別にみると、アレルギー疾患につきあっていくうえで必要だと思う情報として最も割合が高かったのは、いずれの疾患でも「治療方法に関する情報」であった。
- アトピー性皮膚炎患者、食物アレルギー患者は、気管支ぜん息患者と比較して「治療方法に関する情報」、「専門医などの情報」を特に必要としている割合が高かった。

※全体の降順



Q16. アレルギー疾患と付き合っていくうえでどのような情報が必要だと思いますか。(複数回答可)

Summary⑥

大阪府の各種取り組みに対する認知率

▶ 大阪府の各種取り組みに対する認知率は、「アレルギー疾患講演会」16%、「アレルギーポータルサイト」11%と、いずれも低かった。

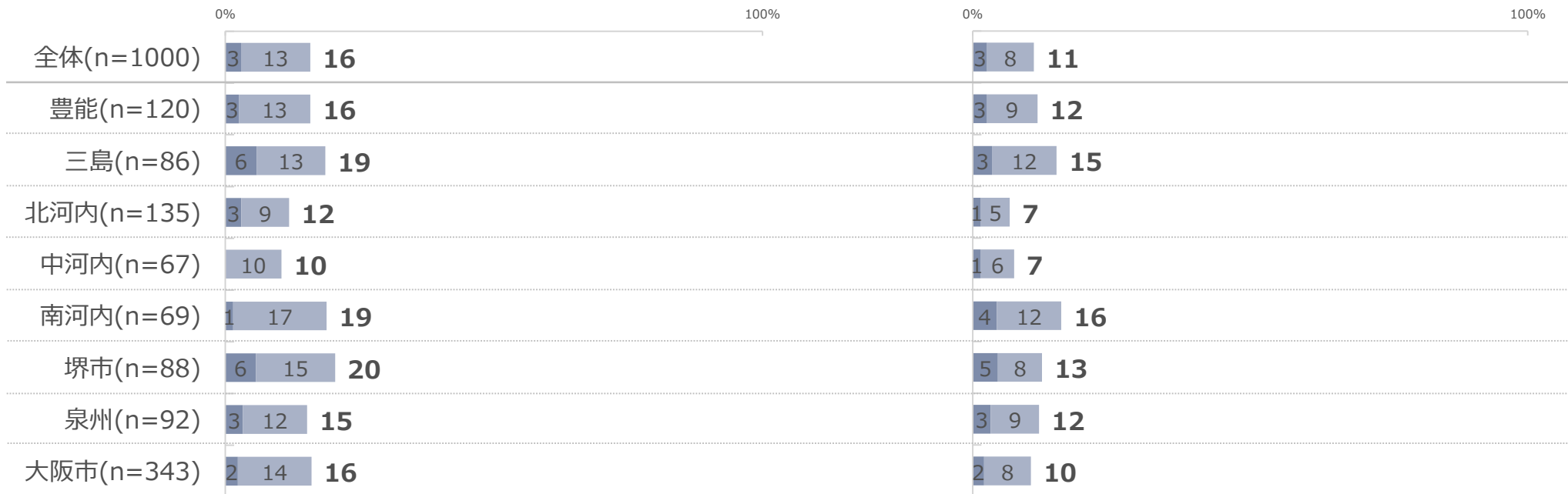
太字：認知率

アレルギー疾患講演会

アレルギーポータルサイト

- 知っており、参加したことがある
- 知っているが、参加したことがない

- 知っており、利用したことがある
- 知っているが、利用したことがない



Q17. 大阪府が府民への啓発活動としてアレルギー疾患講演会を行っていることはご存じでしたか。(ひとつだけ)

Q18. 大阪府が「大阪府アレルギーポータルサイト」により情報発信していることをご存じですか。(ひとつだけ)

Q19. 大阪府が拠点病院を指定するなど医療提供体制整備を進めていることを知っていましたか。(ひとつだけ)

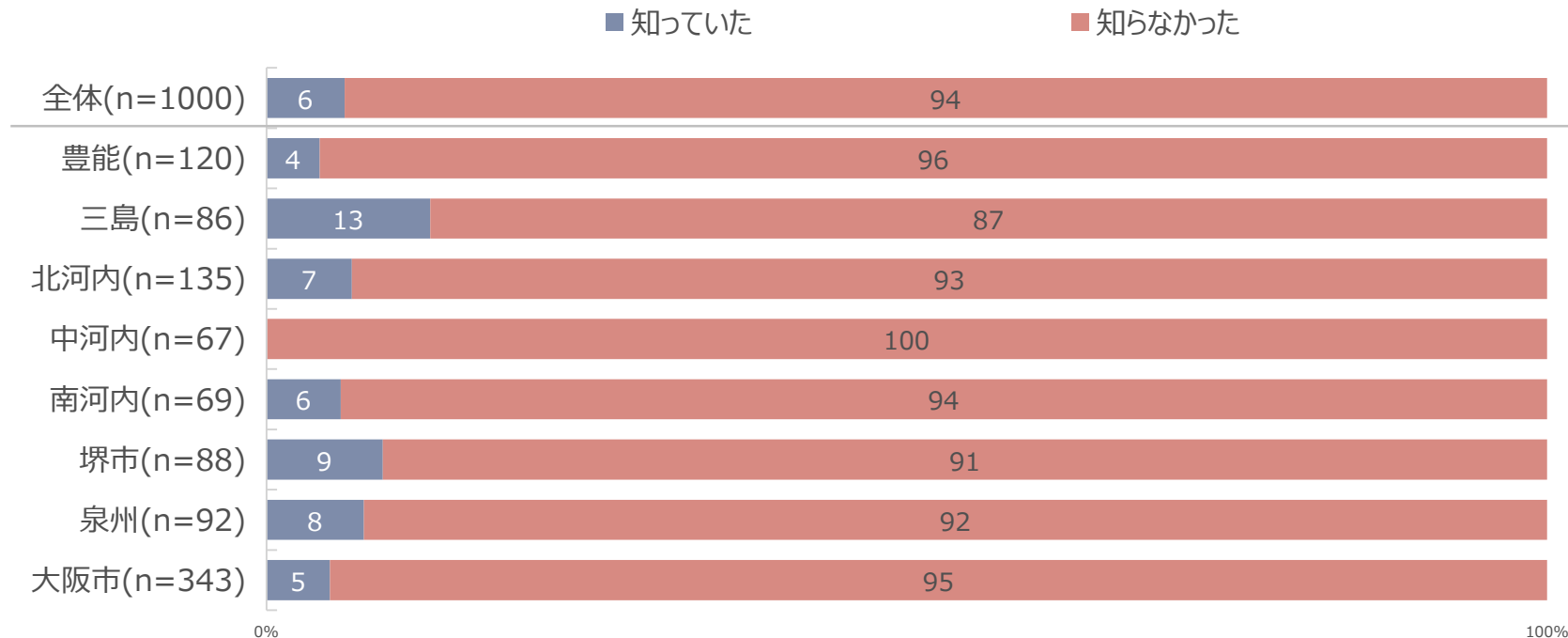
Summary⑦

大阪府が医療提供体制整備を進めていることに対する認知度

▶ 大阪府が医療提供体制整備を進めていることを認知している患者割合は6%であった。

＜アレルギー疾患医療拠点病院＞

「アレルギー疾患医療拠点病院」とは、「アレルギー疾患対策基本法」や同指針において掲げられている「アレルギー疾患を有する者が、その居住する地域にかかわらず等しく科学的知見に基づく適切なアレルギー疾患に係る医療を受けることができるようにすること」を目指して、国が各都道府県に指定するよう求めているものです。大阪府では、平成30年6月に4病院が指定されています。



Q19. 大阪府が拠点病院を指定するなど医療提供体制整備を進めていることを知っていましたか。(ひとつだけ)

Summary⑧

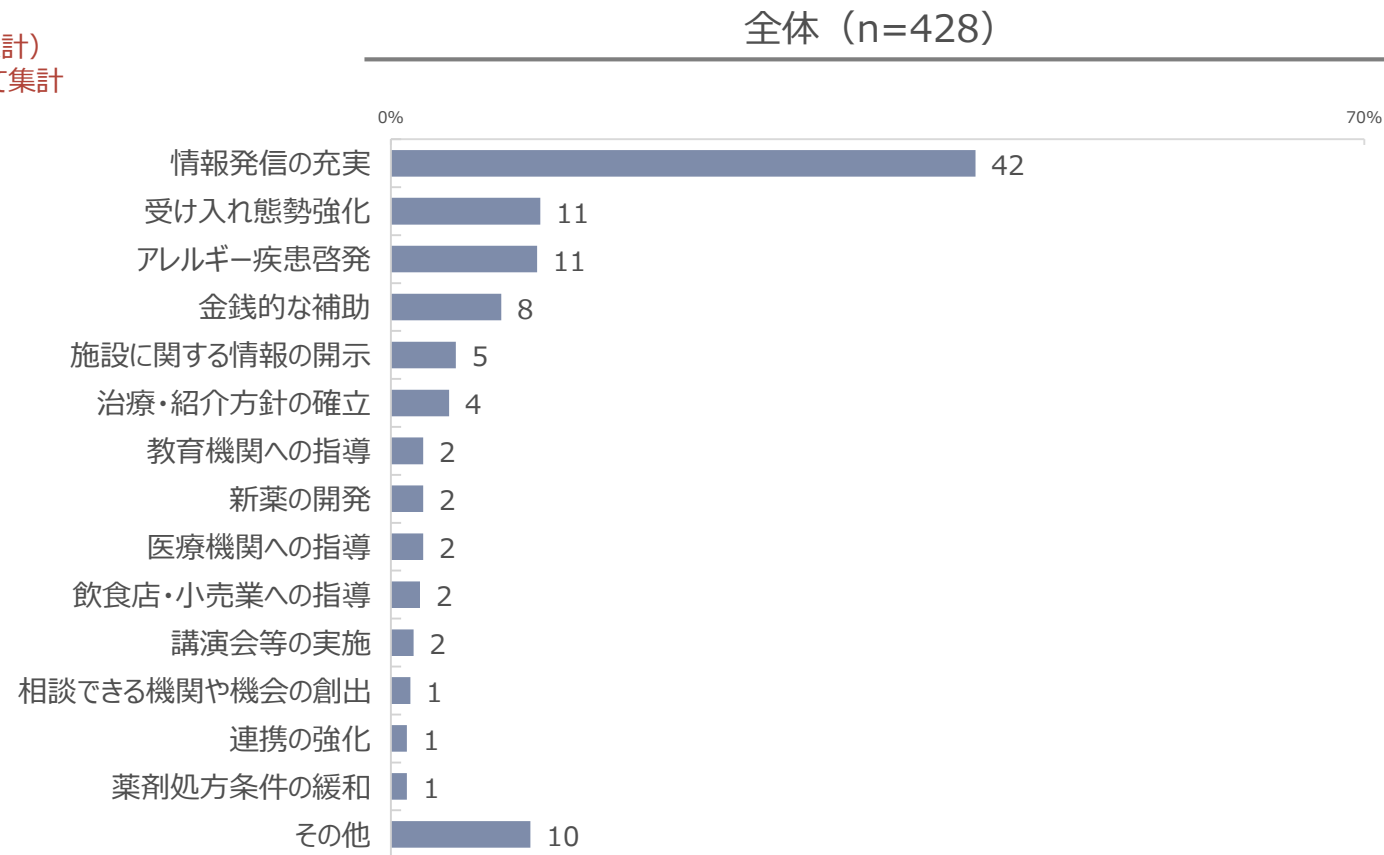
大阪府のアレルギー疾患対策に関する要望

- ▶ 大阪府のアレルギー疾患対策に関する要望として最も挙げたのは「情報発信の充実」。続いて、「受け入れ態勢強化」、「アレルギー疾患啓発」、「金銭的な補助」、「施設に関する情報の開示」、「治療・紹介方針の確立」であった。

※アフターコーディング

(自由回答を同じ内容ごとに分類して集計)

※「特になし」旨を回答した572sを除いて集計



Q21. 大阪府のアレルギー疾患対策について、ご要望がありましたらお聞かせください。